

日文研

2015年3月

no.54

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター



コメリン『東インド会社の起源と発展』扉絵
(オランダ語版、アムステルダム、1646年刊)

17世紀前半にオランダ東インド会社は、ポルトガル人が当時築き上げていたアジア貿易の独占をまたたく間に打ち破り、それから百年の間、喜望峰から日本に至る中間貿易の支配に成功した。東インド会社はこの独占の特権を守るため、できる限りほかの競争相手に情報が漏れないように秘密主義を貫き通した。このような東インド会社の秘密主義を打開した最も重要な出版物が、コメリンの『東インド会社の起源と発展』である。本書は2冊4部から成り、数多くの旅行記のほかに、それまで出版されたことのない東インド会社文書も複数挿入されている。その中には日本に関する極めて質の高い資料が編纂されており、それらの資料は日本の文化や日本における東インド会社の役割に関する全体像を与えてくれる貴重なものである。『東インド会社の起源と発展』の扉絵には、中央に王座に座るふくよかな女性が描かれている。この女性がアジアの女神を象徴していると考えられる。右側に西洋人の商人らしき人物たちが商品を王座の下に並べ、女神を見上げている。また、左側には剣を取り出してお互いに戦っている西洋人の商人が描かれているが、これは、アジアの富をめぐるポルトガル人とオランダ人の戦いを象徴していると思われる。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）

日文研

— エッセイ —

笠谷和比古 プロコフィエフの「越後獅子」コンチェルト 2

末木文美士 発つ鳥いささか跡を濁す 9

早川聞多 故白倉敬彦さんへ 15

牛村 圭 ある好角家の帰還 19

大塚英志 「まんが」が国境を越えた先で出会うもの 25

倉本一宏 「レコ室からこんばんは」から 32

御厨 貴 私の中の日文研 39

— センター通信 —

宮崎康子 外国人日本文化研究者データベース作成プロジェクト

『日本研究 外国人研究員名簿 一九八七〜二〇一三年度』刊行の楽屋裏 44

児嶋さなえ 年中行事 46

共同研究 50

基礎領域研究 64

彙報 66

所員活動一覧 74

エッセイ

プロコフィエフの「越後獅子」コンチエルト

笠谷 和比古

ロシアの作曲家プロコフィエフ (Sergei Prokof'ev 1891～1953) と言えば、小中学校の音楽の時間で習ったのは『ピーターと狼』の音楽劇だし、バレエの好きな人なら『ロメオとジュリエット』を一番に挙げるであろう。

そのプロコフィエフ、作曲家だけれどピアノの名手でもあり、多くのピアノ曲を残し、ピアノ・コンチエルトも五曲を数える。いずれも高度のピアノテクニックが求められるが、中でも超絶技巧で名高いのが第三番のコンチエルト。殊にその第三楽章の演奏はピアノ演奏の極限に位置していると言って過言ではないであろう。ピアニストにとって演奏は文字通り修羅場と化し、その十本の指は鍵盤のうえを怒濤のごとくに駆けめぐり、あらん限りの生命力の燃焼を求める究極のピアノ・コンチエルトだ。

そんなことから筆者にとって好みの一曲となり、CDなどもあれこれ聴き比べて演奏ぶりを楽しんできたのだが、ある時、思いもかけない質問を受けた。プロコフィエフのこの曲の、まさに問題となっている第三楽章には日本の長唄「越後獅子」の曲が取り入れられているという



プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」第3楽章冒頭のアッコット・パート

ことだけれど、どこがそれですかというものであった。それは全く意想外の質問であり、文字通り絶句の体であった。

言われてみて、CDの解説などを読むと、確かにその言及がなされている。ただし真偽のほどは定かではないという断り書も共通しているようであるが。

私は前述のとおり、この曲についてはそのピアノの超絶技巧とオーケストラとの激戦模様のおもしろさを楽しんでいたので、日本の長唄「越後獅子」なんか全く念頭になく、はたまた言われたところで、この曲のいったいどこに、そんなものがあるというのだ。どこに…。

この不思議な問題と取り組みながら、くり返し聴いているうちに奇妙なことに気づいた。ピアノの演奏を中心に聴いている時には（ピアノ協奏曲なのだからピアノを中心に聴くのは当然なのだ）意識にのぼらなかつた妙な音が幽かに鳴っているのに気がついた。それはこの第三楽章の冒頭にアッコットによって奏せられる上のような旋律である。

特に、この旋律の後半部分が確かに長唄風の和旋律だ！

ようやく見つけた。これを指して「越後獅子」を使ったという話になったわけだ。これで一件落着のようなのだが、それが分かると、逆に同時にたくさん疑問が生じてくることとなった。

第一に、この旋律は長唄「越後獅子」の中にある旋律なのかどうか。

第二に、プロコフィエフはなぜこのような旋律をピアノ協奏曲に用いたの

か。

第三に、この旋律はこのピアノ協奏曲の第三楽章のテーマ旋律のはずなのに、どうして弱音（p）で演奏されるのか。この第三楽章はA—B—Aという三部形式を用いており、再現部Aの冒頭にもやはりこの旋律がファゴットで奏せられるのだが、やはりここでも弱音の演奏指定のため、神経を集中してないと聞きのがしてしまう。なかなかこの旋律を見出せなかったのは、このように弱音で幽かに演奏されるためである。なぜ重要な主題提示なのに、二度とも弱音の指定なのか。

第四として、これが重要なのであるが、なぜ主題提示がファゴットであって、主役であるピアノではないのかという疑問である。しかも二度の主題提示の機会に、二度ともにピアノではなくてファゴットであるという事実。

第五として、さらに重要なことに、このファゴットが奏している主題旋律を、協奏曲の主役であるピアノは弾いていないという事実！これは一体どういうことであろうか。ファゴットが冒頭で主題旋律を奏したとしても、それを受け継いで主役のピアノがその主題旋律を明確に奏するのであれば、特に問題にはならないかも知れない。

しかし第三楽章冒頭、ピアノはこのファゴットが奏した主題旋律を引き継ぐ形で弾くけれども、それは最後が不協和音で終わってしまい、主題提示となりえていない。なぜ主題提示の場面で不協和音なのか。これは重要な問題の伏在を伝えるメッセージではないのか。

第六として、第五の問題を強化することになるのだが、この第三楽章の全体を通して、主役であるピアノはファゴットが提示した主題旋律をそもそも弾いていないのではないかという疑問がある。三部形式のAの部分に一箇所、近似的な旋律を奏するところがあるのみである。ピ

アノは主題旋律の周囲をとめどもなく、疾駆するがとき勢いで演奏するのだが、遂に主題旋律そのものは弾かないままに、オーケストラとともに近似的な旋律をもったユニゾンの強奏でこの曲を終えるのである。

この曲はいったい何なの？ 聴けば聴くほどに謎は深まるばかりである。かつてこの曲に抱いていた熱狂とは別の種類の感興が、とめどもなく湧き起こってきた。この曲に秘められた謎、それは取りもなおさず、右に掲げた六つの疑問と関わっている。しかも問題の核心に長唄「越後獅子」が関わっているとあっては、なおのことである。

まず、プロコフィエフと日本文化との接触の問題から見ていきたい。

プロコフィエフが日本を訪れたのは、一九一八年五月末のこと。おりから母国で発生したロシア革命の脅威を避けんがため、アメリカに亡命するために経由地として日本を選んだことによる。日本に到着したけれど、アメリカ行きの船便に手違いが生じたために、彼はその後、同年八月までの二ヶ月間、日本に滞在することになった。そしてそれはプロコフィエフにとって、異文化の地、日本を探究できるまたとない機会を与えた。彼は東京を拠点にして、京都・奈良へと足を伸ばすなど日本各地を探訪している。

作曲家にして、日本という独特の文化地域に関心を抱かない人はいないであろう。日本は、あのプッチーニの名作オペラ『マダム・バタフライ』を世に送り出す原由をなした場所なのだから。プッチーニは日本を訪れる機会のないままに世を去ったけれども、いまプロコフィエフ

は、あの巨匠が自分のオペラのために採取して見事にアレンジして使用した数々の美しく、そしてエキゾチックな響きをもつ日本旋律が、原曲として奏でられているその場所にいるのだ。プロコフィエフが与えられた時間を活用して、これら日本旋律のオリジナルな演奏様態を観察し、研究していったであろうことは想像に難くない。そしてその中で、かの『マダム・バタフライ』においても重要な役割をはたしている長唄「越後獅子」のオリジナルを聴いていたであろうことも容易に諒解できる。日本ならば同曲のレコード盤も簡単に入手しえたであろう。

このような経緯があったことから、第三ピアノ協奏曲に「越後獅子」が使われたという言説が現れてきたのも、むべなるかなである。

そしてまた、このような経緯があるので、同曲の主題旋律に「越後獅子」のそれが用いられていても、特に奇異とするには及ばないであろう。ただし、この旋律そのものについて見た場合、これが「越後獅子」の中に求められるかという点、どうも否定的であるようなのだけれども。これは寧ろ、プロコフィエフが自分で作り上げた彼オリジナルな和風旋律と見た方がよいのかも知れない。彼はかつて『古典交響曲』を作って、あのハイドンがもし現代に生きていたらこんな曲を書くのではないかというウィットの効いた作曲をしたことがあったが、その伝ではないだろうか。

旋律の由来についての研究はさらに続けられるべきであると思うが、筆者が問題視するのは

旋律の出所ではなく、この曲におけるその扱いをめぐる前述のいくつかの疑問点である。第一のものを除いた、残り五つの問題である。

この第三楽章は、ある和風旋律を主題とする超絶技巧的ピアノ協奏曲という構成になると思うのだけれど、なぜ主題旋律は二度ともファゴットによる提示であり、しかもピアノはこの主題提示をなしていないのであろう。展開部においてピアノは執拗にこの主題旋律の断片を奏するのであるけれども、いずれも主題旋律の周囲を駆けめぐるばかりで、ピアノ協奏曲における主役本来の役割を果たしてはいない。

この曲を見ていると、主役はファゴットであり、ピアノは協役の観がある。ファゴットが提示する主題を弾こうとして弾けず、しかもオーケストラの焚きつけるような騒然としたサウンドの渦の中で翻弄されるが如く、主題旋律の周辺を駆けめぐり、不協和音を奏でるといった図ではないであろうか。

このようにこの曲にまつわる疑問を眺めていくなら、ここには一つのストーリーが横たわっているのではないかと思わせるものがある。すなわち、ファゴットは異文化である日本のシンボルとして。ピアノはプロコフィエフその人として。ファゴットの奏でる、これまで経験したことのない日本の旋律に対する憧憬と困惑、名状しがたい混乱と焦燥。プロコフィエフは自分の体験を基に、遊び心をもってそんな音楽物語を作曲・作劇したのではないか、そんな幻想が湧き起こってくるのである。

筆者も本年三月末をもって停年を迎える。このエッセーは日文研で書く最後の文章となることであろう。最後のエッセーに、本職の歴史学関係の事柄ではなく、クラシック音楽談義かと響盤を買うかも知れないが、これが日文研なのである。本来の専門領域は大切にしつつも、そこにとどまっていたはならない。そこからどれだけ飛翔できるか、どれほど翼を広く開くことができるか、他分野の問題と、他領域の研究者と、どれほどに交わり、どれほど積極的に関わって、生産的な議論と成果を産出できるかが求められている。いずれの学問分野においても専門細分化が進行し、研究者は蛸壺状態に置かれる状況であればなおのこと、そのような知的冒険が求められるのである。

日文研では、伝統文化プロジェクトが二〇〇四年以来設けられ、筆者がその長をつとめて一〇年が経過した。長唄「越後獅子」がテーマとなった今回の問題は、その意味において日文研への置き土産として格好の話題となったかも知れない。読者諸賢の御教示、御叱正を請うのみである。

（日文研伝統文化プロジェクト長／国際日本文化研究センター教授）

発つ鳥いささか跡を濁す

末 木 文美士

大学院入学の口述試験で、主任教授の中村元先生から、「大学院を出ても就職はないが、親はそれでも許してくれたか」と尋ねられた。それを承知で入学したわけだが、それでも本当に就職で苦労するとは思わなかった。研究室の助手をしたまではよかったが、その後路頭に迷った。中村先生が創立した財団法人東方研究会（現、公益財団法人中村元東方研究所）の研究者という名目は頂いたが、無給に近いものだった。親の反対を押し切って結婚し、彼女のアパートに『大藏経』とせんべい蒲団だけを持って転がり込んで、養ってもらった。「そういうのを京都では北白川殿というのだ」と、後に中国哲学の福永光司先生に笑われた。そんなジゴロのようなのが、北白川あたりにごろごろしていたらしい。

就職浪人五年で、古巣の東大の印度哲学（現、インド哲学仏教学）の助教授に採用された。特別優秀だったわけではない。前任の田村芳朗先生の弟子で、一応日本仏教の専門家として残ったのは私一人しかおらず、他に選択の余地がなかったわけで、苦渋の人事だったのだらう。当時の東大文学部は、まだ昔流の「象牙の塔」の雰囲気が残っていた。ゼミ生は二、三人、授業は年に一二、三週すればよく、学生が少ないほど、純粹な学問だと威張っていた。教授会は儀礼の場で、配布資料はなく、最初に事務長が二〇分くらいかけて前回の議事録を聞き取れないほどの早口で読み上げるのが見事で、その間にぞろぞろ席に着く、という具合だった。人

事の際の基石投票は今でもされているやり方で、古色蒼然とした木箱を回して、その中の基石を木箱に取り付けた投票箱に入れるのだが、隅の方に坐っていると、白（賛成）の基石の残りが少なくなり、探し出すのに苦勞した。

そんな牧歌的な状況が大きく変わったのは、一九九〇年代の半ば頃で、それまでの小講座制（教授・助教授・助手各一人で一講座）から、研究室単位の大講座制に移行し、ほぼ同時に大学院重点化が進められた。大学の社会貢献がかしましく言われるようになり、「象牙の塔」が槍玉に挙げられた。ちょうど教授に昇進したばかりだったが、その後、ずっと改革という名の改悪に反対し続け、孤立することになった。

「象牙の塔」と言われようと、社会貢献がなかるうと、いいではないか。そういう何の役にも立たないことをこつこつと続けることに、学問の真の価値があるのだという信念は、ずっと揺るがない。ある東大総長が、卒業式の訓辞に「職人であってはならない」と説いて話題になったが、それは間違っている。学者は職人でなければならず、本當の学問とは、名人芸的な職人技に他ならない。気の利いた論文を書くよりも、きちんとテキストが読めるほうが、職人としてよほど価値が高い。その技を磨き、継承していくことが、本来、東大・京大などの「象牙の塔」大学の使命であつたはずだ。

だが、實際上、そういうアナクロ的な超保守主義は通用せず、時代に流されることになった。学生数の少ない専攻はポストが減らされ、インド哲学仏教学はもとにその被害に遭つた。大学院重点化で、定員いっぱいには院生を入学させなければならなくなり、その指導に追われるようになった。課程博士をどんどん出せと言われても、その先の就職先はますます狭くなるばかりで、大量のオーバードクターが社会問題となった。

その場しのぎの国や文部省（文科省）の思い付き政策に追随し、大学はどんどん自主性を失っていった。その総仕上げの大きな転機が国立大学の法人化であった。もとは公務員削減の数値目標達成のために、国立大学教官を一気に非公務員化して数合わせをすることだったらしい。何故かほとんど反対もなく、大学内の議論もないままに、既成事実化して進められた。

だが、その後、どんどん国家予算が削られ、大学は自助努力なるものを要請されるようになった。大学は実利を超えた崇高な真理探究の場（たとえそれが幻想であったとしても）ではなくなり、一種の企業として、完全に世俗の経済原理の中に組み込まれた。大学間の競争が激化するとともに、大学内も無法化し、外部資金の導入に巧みなところが幅を利かせ、学部自治や、まして小さな研究室の自治など完全に吹き飛んだ。時間のかかる職人的修練は見捨てられ、短期で見た目のよい成果があがるプロジェクトばかりが横行するようになった。強迫観念にかられたように、次々と「改革」に追われ、何のための「改革」なのかも分からなくなつた。東大は政府のお膝元として、国のお先棒を担ぎ、国策を先回りしなければならぬかのような、おかしな使命感があり、それが「改革」の横行に拍車をかけている。

それは結局、大学教員の首を自ら締める結果となる。東大には二三年在職したが、最初と最後では、仕事量は確実に数倍になっている。私立大学の忙しい教務担当から東大に移った教員が、以前に倍する忙しさで、悲鳴を上げたほどである。それでも、確かに東大の教員は優秀である。ただ、かつての「象牙の塔」時代に較べて、官僚的になったというか、理念や哲学を論ずることがなくなり、実務型が多くなった感じは強くなる。

忙しさが増しても、気力と体力が具わっているうちは、第一線を先頭に立って走っていると

いう使命感と充実感、他では得難いものがある。学生も優秀だから、それなりに打てば響くし、大学院の演習は実際にはレベルの高い研究会と言ってもよく、私のほうが受け取るものも大きい。二〇人の指導学生の相談を次々に受け、毎朝五〇通を超えるメールを処理し、研究室の主任としてその運営に当たるのは、確かにやりがいのある仕事ではある。それが日本の学界を動かすことになるという責任感も大きい。

それでも、五〇歳を過ぎると、このままでよいのかと、不安になってくる。決められたコースをひたすら走る競走馬でなく、もう少し途中で草でも食べながら、のんびりよそ見をして歩いてもよいのではないか。移籍先がなくても、六〇歳になったら身を退いて、貧乏しながら、自分のしたいことをしようと思うようになった。

そんな時に日文研からお話をいただいて、飛びつくことになった。就職浪人していた頃、日文研創設の動きが始まり、福永先生から、「梅原君に推薦しておく」と言われて期待していたが、後に、「梅原君から何の相談も受けなかった」と怒っていた。そんなわけで、縁のないところと思っていた。それが、瓢箪から駒のように、あれよあれよといううちに話が進んで、桂坂に通うことになった。

最初の頃、どのバスがよいか分からないので、桂から市バスに乗ると、ぐるぐると連れ回され、そのうちに乗客は誰もいなくなつて、本当に着くのか不安になった。学生でゴつた返す大衆を当然と思っていた身には、誰もいない日文研の構内は、何だか廢墟に迷い込んだ感じがした。少し慣れると、見事な枝垂れ桜をはじめとして整備された庭が安らぎを与えてくれ、圧迫感のない和洋折衷の建物も気に入った。英国モデルの図書館の入り口も立派だが、ただ使い勝手はあまりよくない。レストラン赤おには悪くないが、それ以外に近所に食堂もコンビニもな

いことには、閉口した。

イブニング・セミナーや木曜セミナーは気に入った。これも英国のカレッジなどがモデルなのだろうが、海外の研究者を交えて、くつろいだ雰囲気自由で自由に議論を楽しむというのは、学問の原点である。こういう雰囲気は絶対に守らなければいけない。もっとも最初の頃は、まだ東大時代の何かにせかされるような気分が抜けきらず、時間だけ長くて何も決まらない会議に苛立つことが多かった。

移籍と同時に、住まいを京都に移した。京都住まいも夢であったが、これも一生夢で終わるかと思っていた。たまたま知人のマンションが空いているというので、安く借り、憧れの京都町中暮らしをすることになった。京都は中都市の規模で、メ大都市東京と較べると、生活上は不便なところもあるが、街の大きさとしてはちょうど手頃だ。人の歩く速度が東京よりずっと緩やかで、安心する。それに、何よりも歴史の堆積の上に住んでいるのだから、歴史に関わる研究者にとっては、資料に埋もれて暮らすようなものだ。日文研の研究環境とともに、京都という住環境もまた、私の学問を大きく変えることになった。

そんなわけで、あっという間の六年間であった。公的勤務の最後を日文研で迎えられることは、身に余る幸福である。もっとも、六年程度だからよいところもあって、もっと長く勤務を続ければ、おそらくいろいろなところがあるから、うっかりすると、世間の常識から外れることになってしまふ。学際的で自由な研究ができることはよいが、これも切磋琢磨が避けられることで、学会の常識を外れた独断に陥る危険がないわけではない。

いまだによく分からないのは、組織としての意思決定の責任を誰が取るのか、ということ

だ。センター会議が大学の教授会に当る決定機関と言えるが、そのために、所員会議で決定を伝えられるだけの所員は運営に責任を持たず、センター会議の委員とそれ以外の所員の間で意識の差が生ずる。さらに、外部委員を加えた運営会議が最終決定の場であるから、一層責任の所在が曖昧になる。人事のような重要な案件には、もう少し慎重で厳格な審議のルールが必要であろう。

総合研究大学院大学の一部として、大学院生を受け入れていることは、ともすると軽く見られがちだが、じつは非常に重要なことだ。学生が多すぎると、その指導で疲弊するが、まったく学生がいないと活気が失われる。次代への研究の継承という点からも、数は少なくとも学生を育てることには、もっと力を入れてもよいだろう。言い出せば、いろいろ問題は出てくるが、私たちの世代が抜けて若返ることで、新しい発展があるだろうから、日文研の将来はそれほど心配していない。

日文研を辞めて、年金暮らしの自由人となる。しばらくは空手形のようにになっている執筆を片付けなければならないが、あまり未練たらしく学会ボスのような形で老残の身を曝すのも本意でない。しばらくは時に誰かがふと思いつき出し、やがて忘れられるというくらいが、ちょうどよいのだろう。諸行は無常である。

(国際日本文化研究センター教授)

故白倉敬彦さんへ

早川 聞多

去年の十月四日、珍しく帰宅がおそくなり暗い玄関に入ると、女房が重い足どりで迎へに出て来た。そして「白倉さんが亡くなつた。夕方奥さんから電話があつた」と言つた。「ああ」と応へて女房の顔を見ると眼が赤い。夏の末ころの電話で、いつもの声色ながら「食ひ物の匂ひが鼻について口に入らないんだ」といつてをられたので、私はああこれは覚悟してをられるなど感じてゐた。私の最初の癌の手術の後、為事がてらに嵯峨の自宅に來られた白倉さんが、よく一緒に行つてゐた嵐山の鰻屋で、いつも少食の白倉さんの分まで食べる私を見て、「それなら大丈夫だよ」と嬉しさうに笑はれてゐたのを思ひ出したからである。女房から「主人の意志で家族だけで送ります」といふ奥様の伝言を聞いて、「白倉さんらしいな」と思ひつつ、机の前に座り東に向かつてただ瞑目するだけであつた。

白倉さんは日文研における春画艶本の蒐集を、最初から一貫して強く支持され、最後に入院された去年の春まで、実に二十五年間、その資料の調査と選定の相談に常に惜しみないアドバイスをしてくださった。その相談は京都と埼玉の間なので、いつもどちらからか電話して長い話となつた。女房がいふには、「家の電話はまるで白倉さんとの専用回線ね」といふやうな状態で、夜に電話が鳴ると「あ、白倉さんでは」といふほどであつた。

白倉さんと知り合つたのは私が日文研に入つた昭和六十二年以前、大和文華館の学藝員時代

に『蕪村画譜』といふ本を書いた時のことで、三十数年前のことであつた。その頃白倉さんは独立の編集者で、その本の編集担当であつた。春画を介して白倉さんと頻りに連絡をとるやうになつたのは、日教研に入つてすぐ、G社から原寸無修正の『浮世絵秘蔵名品集』全四巻を出すことになつた時からであつた。その時白倉さんは全作品の資料蒐集と厳密な色校正を担当され、それまでにない浮世絵春画の豪華で精緻な複製集を完成された。

その何度目かの編集会議の場で、当時学習院大学のK・T先生が、「これからは正面から春画の研究をする必要があると思ふが、現物の作品にあたることは今の日本ではたいへん難しい。どこか公の機関で蒐集して、誰でも実見して研究できるやうにしなければならぬ」とおつしやつた。その場にをられた東大のT先生、名古屋大のK・M先生、千葉市美のAさんも大きく頷かれたが、「大学や美術館で春画をコレクションするのはまだまだ難しいなあ」といふ話にやつた。そこで若気の至りといふか、「日教研の資料蒐集の一つの柱として提案してみます」と思はず私が申し出たのであるが、それに即座に破顔をもつて応じられたのが白倉さんであつた。家の電話が白倉さんとの専用回線のやうになつたのはそれからのことである。

その頃の日本では、春画艶本は公には強くタブー視されてをり、売立目録のみならず所蔵目録にも公表されることはなかつた時代であつたので、さあ春画艶本を蒐集するといつても、まづはその方面に目の利く信頼のできる古書・古美術商の手助けがなければ、安定した堅実な蒐集は不可能であつた。その最初の難関を開いてくださったのが、先の『浮世絵秘蔵名品集』のために資料収集をされてゐた白倉さんであつた。

さていよいよ春画艶本の蒐集を開始するにあたつて、白倉さんと相談して決めた原則は、
一、浮世絵史の各時期にわたつてバランスのとれたものであること。

- 一、数ある後摺改題本や摸倣本は避け、様々な趣向の劃期的な資料であること。
- 一、日文研に展示場がないことを考慮して、版画版本を主として高価な肉筆の春画は対象外とする。
- 一、蒐集資料はできるだけ早くデジタル化し、順次データベース化してインターネットで公開すること。

かうした意向を誠実に酌み取り、東京のみならず日本各地の売立て市にも目を配り、時には優品の出る欧米のオークションにまで足を運んで春画艷本を取り扱っていたのが、東京の古美術商のS氏である。S氏と白倉さんの間には商売を超えた深い信頼関係があり、またお二人とも公の機関で古美術品、それも春画を蒐集する際のいろいろな難しさをよく理解されてをられた。S氏がこれとは思ふ資料を見出されると、まづ白倉さんに連絡され、白倉さんが実見されて判断がつかないと、先のT先生やK・M先生、Aさんと共に検討される。そしてその都度、白倉さんから電話があり、長い電話となるのであつた。そして私は年に二度、東京に出て白倉さんと現物を見ながら最終判断をし、「近世風俗資料」として購入希望リストに優先順位をつけて、毎年研究資料委員会に申請を出すといふことを二十数年続けてきたのであつた。

一昨年秋に大英博物館で開催された日英交流四百年記念の大春画展に、日文研から相当数の作品を提供できた時には、白倉さんと長いやうで短かつたこの二十数年の春画蒐集を思ひながら、お互ひに電話口で感無量であつたことを思ひ出す。

白倉さんは早くから日本で春画展を開くことを主張してをられ、大英博の春画展が日本の美術館博物館で受け入れられなかったことを歎いてをられた。去年春四月、白倉さん最後の本『春画と人びと——描いた人・観た人・広めた人』の後書きに、病床にあつた白倉さんは次の

やうに記してをられる。

春画にとって大切なことは、春画を特別視しないことだ。春画は人間の自然な営みの一つ、性行為を描いたものだ。性行為は別に特別なものではないし、成人男女にとっては自然な営みの一つである。それをタブー視するから、猥褻に見えるのである。とくに日本では、猥褻かどうかの基準の一つに、生殖器が見えるかどうかが問題となる。あたかも、人間誰しもが保持している生殖器が猥褻物であるかのようなようだ。これには、西欧人も大笑い。判りやすい基準ではあるが、あまりにも幼稚で愚劣で馬鹿々々しいと散々である。

そして十二年前、白倉さんと一緒に企画から参加したヘルシンキ市美術館での春画展を回想しながら、

(会場では) 幼い子らがはしゃぎ廻っていた。そこにあるのは、明るい笑いだけだ。かつての江戸も同じような感覚であったはずだ。どうして、いつから、それができなくなったのだろうか？不思議といわざるを得ない。

これが白倉さんの最後の文である。私は最後の電話で、今年の秋に東京で開催されることになった春画展のことを、その時話したであらうか。後で思ふと、あの時の白倉さんの声が肉耳にありありと残つてゐるだけで、まったく覚えてゐない。何とも残念である。

(国際日本文化研究センター教授)

ある好角家の帰還

牛村 圭

How I became a Sumo-enthusiast.

幼いころ夢中だったのに、やがて年齢相応に多事となり次第に関心が薄れていったものがある。その後何十年も経たのち、ふとしたことから遠い昔の関心事に立ち返ることがあるらしい、と思いいたっている。

小学生時代の後半、相撲に夢中だった。年六回の本場所開催中は、学校から帰ればテレビで大相撲中継を欠かさずに観た。ビデオ録画など思いもよらぬ時代であり、生中継しか楽しむ術はなかった。場所中の日曜午後、家族で繁華街へ出かけるときは、百貨店の家電売り場でのテレビ中継を気にしながら店内を歩いた。新潟市の海浜地帯に住んでいたため、本場所開催地は遠く、取組を直に観戦することなどかなわぬ夢だった。

夢中になるには、きっかけがある。この場合は、たまたまテレビで見た優勝決定戦、すなわち昭和四十四年七月の名古屋場所（横綱柏戸が引退を表明した場所でもある）の十二勝三敗の相星となった新大関清國と前頭藤ノ川の一戦だった。浴びせ倒して新大関が勝ち、次場所連続優勝すれば一気に横綱だ、と言われた（その秋場所、清國は麒麟児「のちの大麒麟」との一番で頸椎を痛め、その後の優勝はなかった）。それ以前、そこそこに相撲好きだった父が観ている本場所中継を横で眺めたことはあったが、さほど興味は惹かれなかった。しかし、この決

定戦を目の当たりにして、相撲は面白い、と初めて思った。

実践と「研究」に明け暮れて

こうして相撲の世界へと誘われたものの、惹かれたのは取組内容であり、この二力士のファンになったのではなかった。その一方、まもなくお気に入り力士ができた。好きな女の子の名を、少年はなかなか口にしないものだ。周囲が推測してはかかって、うつむいて口を閉ざす。同じように、熱烈なファンとなった力士の名は、ついぞ親しい友にも洩らすことはなかったし、半世紀ほどたった今でも記すのはやや気恥ずかしい。でも一寸だけ書いておこう……それは、まだ十代の童顔、若手のなかで初めて大鵬に土をつけ将来を囑望され、いざれ綱を張って四代目西ノ海を名乗るのでは、という期待もあった力士である。十才になったばかりの学童には、童顔のハイティーン力士は、なによりも親しみが持てたのだった。

テレビ観戦だけではなく、学校の休み時間には数名の友と体育館や廊下で相撲をとって遊んだし、一方、研究にも余念がなかった。といっても、全国紙のスポーツ欄に掲載される大相撲関連の記事、そしてなけなしの小遣いでたまに購入したベースボールマガジン社の月刊誌『相撲』を熟読する程度だった。『小学生新聞』ではなく大人の新聞、『相撲』という大人の雑誌、は言葉の学習にも役立つ。『土壇場で勝ちを拾う』、『大鵬の独壇場』、『土俵際まで押し込んだものの惜敗』などという表現を頻繁に目にして、語彙が増えた。もっとも、新聞の社会面の見出しに「北富士演習場」とあるので、当時大関から横綱にあがった北の富士関連の記事かと思えば、富士山麓の自衛隊演習場のことと分かり、拍子抜けしたこともあったが。

Out of sight, out of mind.

わが相撲好きは級友たちの広く知るところとなり、公害病をもじって、牛村は「スモウ病」患者だ、と揶揄された。学期末のお楽しみ会では、相撲好きの友と二人、寄り切りや下手投げなどの主要な決まり手や、網打ち、渡し込みといったやや珍しい決まり手を実演で紹介をして、「啓蒙」活動にもいそしんだ。頻繁に相撲を取って遊んでいたためか、四年生まではクラスで一、二を争う鈍足だったのに、五年になると普通に、そして六年ではリレーメンバーになるまでに進歩した。蓋し、相撲ごっこがアイソメトリックス的な筋力トレーニングに成り得ていたのだろう。

父の転勤で六年生の夏休みに県内の山間部へと居所を変えた。転校先でも早速、相撲を通して仲間ができた。ポートボールコートが優に二つ取れる大きな体育館が土俵となった。豪雪の冬でも、休み時間を終えると身体は暖かだった。卒業文集には何を書いてもよいというので、「相撲とぼく」と題して相撲との出会いや楽しさを綴った。出来上がった文集に目を通した両親が、「なんで相撲なんだ？ほかにも書くことはあっただろうに……」とややがっかりして訊いてきたことを思い出す。

顧みるに、卒業文集に一文を寄せたところが、わが相撲熱のピークだったのだろう。中学校へ進み陸上競技部での練習に明け暮れるようになると、もはやテレビ中継の時間に在宅はかなわなくなつた。先述のお気に入り力士の動向はチェックしていたし、「姥桜」とか「ポロ桜」などと揶揄されていた不振大関の琴櫻（しんやう）が、冬眠から目覚めたかのごとく連続優勝して横綱昇進を確かなものとした北の富士との一番（昭和四十八年初場所千秋楽）などは観る機会があったが、夜のニュースで主な取組結果を知ることくらいしかできず、次第に熱は冷めていった。愛

読雑誌が、『相撲』から同じ版元の『陸上競技マガジン』へ移るのと軌を一にしていた。

小学生のころの傾倒ぶりはなくなった。その後の、つまり昭和四十年代後半から誕生した横綱たちの名前を出されて、時系列に沿って並べよ、と問われれば、「正解」を出せる自信はあるものの、その程度の相撲好きへと墮ちて月日を重ねていった。気がつけば、いつしか自分と同年代の元力士たちが、日本相撲協会の要職に就く時代になっていた。

二人の玉治郎

五、六年ほど前のある日のこと、テレビのスイッチを入れると、大相撲放送の時間帯だった。力士たちが格段に大柄になったと感じながら画面を見てみると、聞き覚えのある懐かしい声が館内に響くのが聞こえてきた。アナウンサーは、「玉治郎の軍配が返った」と言っていたと思う。この瞬間、一気に時を遡り、昭和四十年代に戻った気がした。懐かしい声の主は木村玉治郎きむらたまじろうという行司、小学校に通う児童だったあのころ、大のお気に入りだったあの行司の名だった。もちろん、大正末年の生まれだった当時の玉治郎は、その後出世して、式守伊之助しきもりいのおすけそして木村庄之助きむらむさしのすけという立行司たてぎしとなり、定年を迎えて角界をとうに去っていた。目の前の行司は同じ玉治郎ながらも、体軀はあの玉治郎より二回りは大きく、風貌はかつての式守伊三郎しきもりいさぶろうを思わせた。だが、取組をさばく所作、そして小気味よいかけ声は、四十年前の玉治郎と瓜二つなのだった。

きらびやかな装束を身にまとい取組をさばく行司たちの姿を観るのも、子どものころの楽しみだった。手製の軍配ぐんぱいを作り、柄の部分の先に毛糸を長目に取りつけ、端には房をつけた。結びの触れを口にする立行司の真似をするときには、その房を畳の床に垂らし、一人悦に入っ

ていた。日本史好きの学童でもあったので、行司の装束は大名の正装を想起させ、二重に好奇心を刺激した。そういう行司たちのなかでも、木村玉治郎の所作は格段に美しく、館内によく通る声には惚れ惚れした。十代前半の子どもでもできえ、抜きん出た行司であることは分かった。行司の世界は年功序列だったが、玉治郎の才は相撲協会幹部が認めるところとなり、先輩格二人を抜いて昇進していった。

こちらが大相撲から遠ざかっている間に、その木村玉治郎の名跡を継ぐ行司が現れていた（この二人の間にも玉治郎を名乗る行司がいたことをのちに知った）。名ばかりか、所作や発声までそっくりだった。早速調べると、年齢はこちらより一つ下、少年の日にあの木村玉治郎その人にあこがれて弟子入りしたという。昭和四十年代、日本のどこかで同じように木村玉治郎に魅了されていた少年がいたのである。そしてこの玉治郎行司、正しくは第六代木村玉治郎は、師匠である第四代を手本として所作や発声を研究していることをも知った。全くの偶然から気になる存在となった第六代の土俵さばきを何回か観るうちに、幼いころの相撲熱が少しずつ蘇っていくのを感じた。

バイオメカニクスを活用せよ

こうしてまた、機会ある限り大相撲中継を観戦するようになった。日本人横綱の誕生が待たれていることを、番組を観ていて痛感した。しかしながら、こういう立ち合いをしてはあの願いも叶わないだろう、と度々思った。

「待ったなし」のあとの立ち合いでは、仕切り線に両手をつけて立つ、というのが今では不文律である。昭和の昔、多くの力士は片手すらつかずに立っており、両手をつけて立っていた

大関清國きよくにの所作の美しさが際立っていた。手をつかずに立つときは、最後の仕切りの動きから来る勢いを立ち合いに利用できる。一方、両手をつけてからの立ち合いでは、初速度ゼロからの発進となるため、飛び出す角度はもとより、手をつく位置と両足の位置との間隔などが、立ち合い直後の速度、ひいてはエネルギー量を決定する。横綱候補といわれて久しい稀勢きせの里さとなど、手の位置と両足の間隔が広いため、立ち合いで相手を圧倒することは難しいと思わざるを得ない。そういう力士が少なからずいる。親方衆は「立ち合いのきびしさが足らない」などと常套句を口にするが、バイオメカニクスに基づいたコーチングこそが急務に思える。やや暴論だが、陸上競技のクラウチングスタートの練習なども存外効果があるのではないか。

また大関ともなると、ぶつかり稽古で番付下位の力士に胸を出して稽古をつける機会も多い。だが、自らの立ち合いを磨くためには、相手の胸にあたっていく稽古をも積み重ねばなるまい。胸を出すだけのぶつかり稽古は、綱への道ではない。三十年ほど以前、ラグビー日本代表が相撲部屋に一日「入門」して、立ち合いの稽古に励むことがあった。今の力士は逆に、ラグビー選抜チームに加わり、タックルの技を学ぶことが功を奏すのではないか。筋力的大幅な向上は高いレベルの力士には望めない以上、理論に依拠した技術の修得や改善が、番付をあげる近道だろう。教師の性さがなのか、こうしてあれこれ注文をつけたくなりながら、テレビ画面に見入っている。学童のころ、湯飲み茶碗を手にして熱のこもった一番を覗いていると、「お茶がこぼれてるわよ!」と母によく言われたものだった。四十数年経たいま、中学生になった下の娘が、「おとうさん、コップ、コップ! 水がこぼれてる!」と遠くで叫んでいる。好角家に戻った証あかし、ということなのか。

(国際日本文化研究センター教授)

「まんが」が国境を越えた先で出会うもの

大塚 英志

何度も書いてきたことだが、「国際日本文化研究センター」の広報誌なので、もう一度、書く。この国のまんがやアニメーションは「日本文化」なのか、という極めて本質的な問題だ。図1を見てほしい。中央にいるAのキャラクターは、果たしてBの兎の末裔なのか、Cの鼠や猫の子孫なのか、と改めて問うてみる。確かに、Bの兎、すなわち「人物鳥獣戯画」が、今日の「日本まんが」の出自だと当たり前のように語る人々がいる。しかし、戦後まんがの基礎を作った手塚治虫の描いたキャラクターである「アトム」や「レオ」（つまりB）のほうが、ぼくにはどうしてもCの鼠や猫ととても近い親戚関係に思える。これは、ぼくの目の錯覚なのだろうか。

この国の現在のキャラクターの書式が、一九四〇年代に大量に刊行された「ミックスマウス」の海賊版から立ち上がった歴史的事実をここで語り直す余裕はないが、北米のアニメーション研究者トマス・ラマールが現在の（あくまで「現在」だ）の「日本」のポップカルチャーの中に組み込まれていると考える「アニメ機械」が、ディズニーの『白雪姫』に於けるマルチプレーン方式の一五年戦争下日本に於ける受容が出发点である事実と同様、この国のまんが・アニメーション表現は一九三〇年代以降、世界を一瞬で覆い尽くしたあの鼠とそのスタジオのもたらしたものの、極東の島国に於けるローカライゼーションに過ぎない、と何故、冷

静に考えられないのか。いや、「信貴山縁起」に於ける映画的な表現がなければ今日のアニメーションの隆盛はなかったと、あの高畑勲が『十二世紀のアニメーション』の中で解析してみたのではないか、という反論もあるだろう。しかし、高畑があの本で行なった絵巻に「映画性」を見出す思考法そのものが、エizenシュテインがその著書『映画の弁証法』に於いて、漢字の偏と旁から歌舞伎の演技まで日本文化をことごとく「モンタージュ」だと言い張ったことを受けて、「絵巻」の中に強引に映画性を見出す言説が戦時下に成立したことでもたらされたものだ。しかも、その時点で、「映画的」とは「モンタージュ」の意味で、更に「日本的」とさえ、同義になっていたのだ。そう、立証しても耳を傾けてくれる人は少ない。ならば、一体、まんがやアニメーションの様式や美学がこの列島の

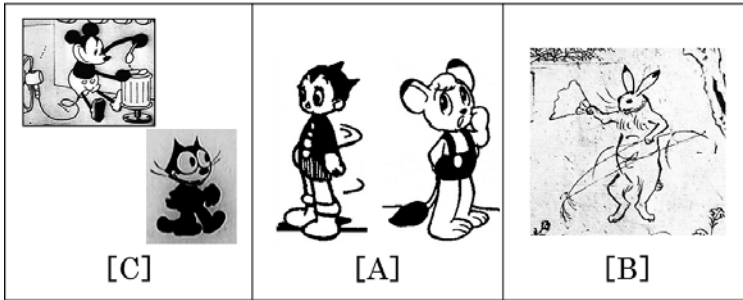


図1 A 左 手塚治虫「鉄腕アトム」(1951-1968、図版出典 手塚治虫「手塚治虫漫画全集 221 鉄腕アトム 1」1979年、講談社)
 A 右 手塚治虫「ジャングル大帝」(1950-1954、図版出典 手塚治虫「手塚治虫漫画全集 1 ジャングル大帝 1」1977年、講談社)
 B 『鳥獣人物戯画絵巻』(12C)
 C 上 Steamboat Willie (Walt Disney, 1928)
 C 下 Felix The Cat in Arabiantics (Pat Sullivan, 1928)

伝統とどう結びついているのか、思い込みでなく説明してほしいとも思う。

そもそも、ほんの少し前まで、日本まんがやアニメーションは「無国籍文化」の最たるものだ、と言われてきたではないか。そうやって、ほんの少し前の過去を忘却することが、近頃のこの国はとても得意だ。だが、まんがやアニメーションは、良くも悪くも歴史や伝統と切断されているからこそ、ひどく不用意に文化や国境を超え得る属性を持つ。それはこの国のまんがアニメに始まったことではない。

第二次世界大戦下、ドイツではミッキーのキャラクターをつけた戦闘機部隊があった。ゲッペルスはドイツ国民にはディズニーの輸入を禁じつつ、『白雪姫』をこっそり見ていた。あるいは今村太平のディズニーマニア論『漫画映画論』がミッキーの中扉をつけたまま、太平洋戦争下も堂々と刊行され、更には抗日運動の勃興した上海で『白雪姫』の中国語タイトル「白雪公主」を模したアジア最初の長編アニメーション『鉄扇公主』が生まれた。あの嵐と、そのスタジオのもたらしたものは、文化や政治体制やイデオロギーなどの全ての差異をひどく無頓着に超えてしまう。だからその末裔であるこの国のまんがやアニメが、容易に国境を越えてしまうのはむしろ当然のことなのだ。

そもそもまんがやアニメが「無国籍的」に伝わっていくのは、ぼくたちこの文化の当事者（言うまでもなくぼくは現役の、といっても、今一つぱっとはしないが、まんがの創り手として、高校生の時から今に至る）にとっては自明のことだった。たとえば、韓国では日本文化が解禁されるのは一九九八年からだから、それ以前の日本まんが出版は海賊版だった。そして日本まんがも作者やキャラクター名は韓国名に置き換えられていた。台湾でもそういう時代があった。北米で公開された日本のＴＶアニメのキャラクター名は、大抵アメリカふうやその

ほかの外国名に置き換わっていた。スイス人はアニメ『アルプスの少女ハイジ』を「国産」だと思っていた、という笑い話さえ彼の国のジャーナリストから聞いた。どの国でもそれで不思議に思わなかったという。「無国籍的」というのは、だから比喩でもなんでもない。そういう事実は、ぼくたち最初の「おたく」の世代にとっては自明のことであった。

そして、まんがを創る側に回ってぼくなどが改めて思い知るのには、まんがやアニメーションがあまりに無邪気に国境を越えてしまうことの恐ろしさである。これも幾度も書いたことが、ぼくが初めてそのことを実感したのはもう十何年も前、まんが家だったぼくの家のサイン会のために台湾に同行した時のことだ。彼女は日本ではさして人気まんが家というわけでもなかったが、それでも大袈裟でなく何百人かの列ができた。その中に台湾の「先住民族」（今は「原住民」と表記するのが台湾では正しい書き方なのだろうが、日本語では違和があるのだからこう記す）の女の子がいた。彼女の父母や祖父父母の世代には日本との間にあまりにぬぐい難い歴史が当然あるから、ぼくも家内もひどく混乱した。しかし、彼女はありふれたファンとして列に並び、日本語と中国語の混じったファンレターをはにかんで渡してくれた。何一つポリテイカルな話はしなかったし、しようもなかったが、自分たちの無国籍な文化に乗って気易く国境を越えて旅をしてきて、目の前で「歴史」に不意打ちを食らった気がしたのだ。けれどそれは悪くない経験だった。

「日本まんが」のファンイベントに行くのと、その地域の人口比と比べてもそこに集まる人々の顔ぶれは相対的にマイノリティーの率が高い、ということには、ぼくたちまんが関係者は薄々感じている。これもデリケートな問題だからあまり口にする人はいない。けれども、今では、パリで起きた風刺雑誌のテロのあと、ぼくの「まんがの描き方教室」の生徒にイスラムの移民

の子弟が座っていても、現地の通訳がベトナム系デンマーク人の日本アニメおたくであつても、少しも驚かない。しかし、ぼくたちの「文化」が不用意に越えてしまつてゐるものが常にそこにある、ということだけはいつも実感せずにはおれない。だからこそ、不用意に飛び越えることと、理解ししあつたと思ひ込むことは少しも同じではない、といつも思う。

ニューヨークでは、移民やマイノリティーの子弟たちにまんがを書かせるワークショップをやっている人がいる。いつか会いに行きたいと思つてゐるのだけれど、そこで若者たちが書く「まんが」は『ジャンプ』もどきというか、アニメふうというか、つまり現在の「日本様式」だ。しかし、そういう「まんが」を書いていく中で、彼らは文化的社会的アイデンティティを何となく回復していくという。だからといつて、これぞ日本文化のソフトパワーだと間違つても勘違いしてほしくない。良くも悪くも「アメリカ」を表象しているようなマーベルコミックのキャラクターに自分を投影できない少数派の彼らが、無国籍な日本まんがのキャラクターを暫定的な自我の容れ物として使つてくれているのだらうと、何となく想像はつく。各国で盛んなアニメキャラのコスプレにしても、「無国籍な容れ物」だから文化的社会的に不安定な自我を入れるのには向いているのだ。実際、ぼくも、これまでぼくと一緒に何かを創つていた連中も、それから以前、教えていた「まんがの大学」の生徒たちも、言っちゃあ何だが、社会的にはいまひとつうまく適応できない点で共通だ。そういう不確かな何かの容れ物に、この無国籍な文化は向いている、といつも思う。

だからこそ国籍を越えて、ぼくは台湾の先住民やイスラムの子たちと出会い、愕然とすることもまたできたのだ。そうやって、越えた後で、越えたものの「重み」を省みる機会を与えられている、といつも思う。

だが、この十数年、この国は「クール・ジャパン」だか何だか知らないが、海外に日本まんがやアニメのファンが増えたのをいいことに、これこそが世界に誇る「日本文化」だ、と言いつ出す人たちが、ぼくたち作り手の外側に随分増えた。彼らはぼくたちが「日本文化」でなく「無国籍文化」だからこそ、国境を越え得たことの意味が、全くわかっていないように思える。世界各地のファンたちを日本産コンテンツの「市場」と、さもしくみなし、あるいは、「国力」の証しの一つとして語り、まんが・アニメが国境を越えたと大きく便乗して国境を越えていった現代美術家や学者もいた。それらはぼくにはひどく貧しいものに感じられる。こういった人たちは、「日本」をまんがやアニメに勝手に背負させた瞬間、受けとめる側から見た時に文化侵略に見えることにさえ気がつかない。日本のある大手コンテンツ企業が、アジアのある国に進出しようとして内部向けに作ったプレゼン資料に、日本のアニメキャラの大群が飛行機に乗ってその国に押し寄せてくるイラストを使って現地で響感を買ったことをぼくなどは直接見聞き知っている。「多数派の文化」を表象してないからこそ、ささやかにだが世界に開かれていたチャネルがその瞬間、失われてしまうのだ。だからこそ、まんがやアニメが「日本文化」と喧伝されて以降、この国の「おたく」たちの一部が異文化、特に東アジアに対してひどく不寛容になっていることもぼくは危惧する。

そういうわけで、ぼくはこの国の政府がクールジャパンなどと口走り始めた頃からずっと苛立っている。ただ苛立っていても仕方ないから、ここ何年かは、「まんがの描き方」のカリキュラムを持って、教え子の内、教師に向いていると考えたごく少数の者をつれて国境を越えることをずっとしてきた。「描く」という水準で異文化と関わった瞬間、ぼくたちは、本当は何が伝わり、何が伝わらなかったかを初めて知ることができる。ありふれた言い方だが、僕は

ちはそこで初めて異文化から真摯に学ぶことさえ出来る。そういうことを考えられる教師を一人か二人は作りたかったのだ。幸いにも、反日デモの直後の北京や、イスラムの子も通う学校で一緒にワークショップをして回った教え子の一人は、フランスの片田舎にある日本式のまんがを教える私塾（君は授業中自分の席に座っていられないんだよなあ、という小学生の男の子が生徒にちゃんと混じっているのがとても健全な学校だ）で「先生」となり、もう一人も、北京の大学の先生になる話が進んでいる。

だからもし、この国が、ぼくたちの分野がささやかに開いたチャンネルを通じて何かを届けようと思うのなら、やるべきことは明らかではないか、いつも思う。越えていった先の、ひとつひとつの現場で教えることのできる教師や、海外に向けた「教え方」をどうつくっていくかが大切だ。カリキュラムの試行錯誤を繰り返し、教科書をつくる。そういう手間のかかる積み重ねの中で、はじめて「まんが」はこの国の外側に届く。当然、それは「創作」に限らない。その「描き方」を教えたり、まして、海外に向けていかに語るかという努力など少しもこの国でなされていないではないか。

それは当然、ぼくの仕事だ。しかし、正直に言えば、日文研がそのために、ぼくにとって「使える」組織か、といえればそれはいささか疑問である。

（まんが原作者／国際日本文化研究センター教授）

「レコ室からこんばんは」から

倉本 一宏

京都にあるKBSラジオに、「レコ室からこんばんは」という深夜放送番組があった。という他人行儀だが、実は我らが細川周平さんが担当されていた音楽番組である。

二〇一三年に『御堂関白記』がユネスコの「世界の記憶（俗にいう世界記憶遺産）」に登録されたのを機に、私などにもラジオの出演依頼が相次いだ。が、何とこの番組からも、『御堂関白記』で二回、何か話してくれないか」という依頼が来た。

もちろん、かねて畏敬する細川さんからの依頼だったので、一も二もなく快諾した。日文研用語の「快諾」ではなく、文字どおりの快諾である。基本的には音楽番組ということで、色々なレコードをかけてもらえるのも楽しみだったのだが、結果的には自分の所蔵しているCDを持ち込んで、それをかけながら、二人で感想を言い合うという番組になった。まったく台本なしの収録である。『御堂関白記』はそっちのけで、音楽の話ばかりになったのは、言うまでもない（二回目にはギターを持ち込んで、一曲歌わせてもらった。私は元、駒場フォーク村所属だったのである）。

番組は二〇一四年一月二〇日と二七日に放送され、大きな反響を、まったく呼ばなかった。日曜の深夜にローカル局のラジオを聞いている方というのは、きわめて限られるのである。

ところで最近、所蔵しているCDとDVDとMDをファイリングしてデータベース化する作

業を続けているのだが（LPとカセットテープは未だ手付かず）、その際、全部を聞き直して
みることにした（もちろん、真面目な原稿を書きながらですよ）。

そしてこの放送のCD-Rの順番が来て、何気なく聞いていると、我ながら、なかなかいいこ
とをしゃべっているのである。これもひとえに、細川さんのお人柄によるものなのだが、普段
は私はこないことを話すことはないのです、これをごく少数の方だけのお耳を通過させただ
けではもったいないと思い、ここに編集して、『日文研』に載せていただくという次第である。

なお、はじめは桂枝雀師匠の「どうらんの幸助」について、所蔵している六バージョンを比
較するという原稿を書き始めていたのだが、その最中にこのCD-Rを聞き、細川さんとKB
Sの担当ディレクターである小林恭子さんの承諾を得て、こちらに差し替えたというわけであ
る。「どうらんの幸助」論は、いずれどこかで発表したい。

それでは、放送された曲順に、私の発言をお示しする。

一、「藤原道長と『御堂関白記』」（二〇一四年一月二十日放送） 実はジャズ編

• Miles Davis “Round Midnight” (1955) — “Round About Midnight (Legacy Edition)” より

皆さんがご存じの『ラウンド・ミッドナイト』ではない、その前のニューボートのライブの
バージョンです。作曲者のモンクと共演しています。この時の演奏が認められて、マイルスは
メジャーのコロンビアに移籍するわけです。この演奏では、お馴染みの「ジャンジャンジャ
ン」というブリッジがないのです。モンクの影響下にある時には原曲に忠実で、ギル・エバン
スと独自の世界を築いてからは、あのブリッジが入ります。面白いのは、それ以降、マイルス
の影響下にある人、ハービー・ハンコックとかチック・コリアとかは、ブリッジを入れるので

す。ウィントン・マルサリスなんかも、ハンコックの下にいる時はブリッジを入れるんですが、独立してからは入れないのです。これは面白い傾向です。

• John Coltrane “Autumn Leaves” (1961) — “Graz Concert Vol. 1” より

私はコルトレーンが一番好きなんです。コルトレーンの全演奏記録でも、「枯葉」を吹いているのは生涯でただ一回だけなんです。グラーツでのコンサートです。何でこの時だけ、「枯葉」を吹いたのだろうと推測しますと、最初、マッコイ・タイナーのソロが四分半くらい続くんなんです。そこにコルトレーンがいきなり入ってくるんで、これはピアノトリオの曲として始まったのに、あまりに素晴らしいのでサックスを持って入ってきたんじゃないかなと想像したりしています。あと、コルトレーンが長生きしていたら、どんな演奏をやっていたかと、あれこれ考えてしまいます。

• John Coltrane “Wise One” (1961) — “Crescent” より

この曲がコルトレーンの中で一番好きなんです。コルトレーンは一曲録音するのに十何回もテイクを録るんですが、本当の天才は一回で決めるんだと思います。吹き続けて下によだれの水溜まりができるコルトレーンの方に、私は天才よりも憧れを感じますね。

• Stan Getz “La Fiesta” (1972) — “Portrait” より

チック・コリアの「ラ・フィエスタ」は、普通はリターン・トゥ・フォーエバーで聞いていると思いますが、その前にスタン・ゲッツのコンボで演奏しています。普段は「クール」と捉えられるゲッツが、リズムが物凄いのので（ドラムはトニー・ウィリアムス）、ここでは吹きまくっています。この後、みんな独立してしまい、ゲッツはクールなスタイルに戻りますが、このままこのコンボが続いていたらどんな演奏を行なっていたかと考えてしまいます。人間の評

価と運命なんて、わからないもんですね。

・仲宗根かほる“Papa Loves Mambo” (2001) — “Papa Loves Mambo” より

最近、年を取って、硬派なジャズよりも女性ポーカーに凝っています。この方は中学の卒業式の日に出出して沖繩から東京に出て来た方です。このところ所在不明になっています。ご存じの方がおられましたら、お知らせください（その後、銀座のジャズクラブ「Swing」のオーナーである岩本悟さんから、沖繩に帰っている由をご教示いただいた）。

・MAYA “Eu sou um piano (私はピアノ — 曲名非通知)” (2002) — “She’s Something” より

かほるさんと入れ替わりに出てきたのが、MAYAさんで、この人は七カ国語で歌うという才人です。これはポルトガル語の「私はピアノ」です。私はこの人のファンクラブに入っていて、追っかけをやっていきます。

二、「藤原道長の日常生活」(二〇一四年一月二七日放送) 実はロック、フォーク編

・Bob Dylan “Seven Days” (1975) — “WATERBURY 1975 Rolling Thunder Revue” より

私はディランのキャリアの中で、七四年から七六年が一番好きなんです。特に七五・七六年のローリング・サンダー・レビューというツアーは、海賊版を買い込んだり、演奏順に並べ替えて聞いたりしています。学生の頃はフォーク研で、盛んに弾いていました。その頃は英語も少してきたので、ディランの詩を訳したりもしていました。これは珍しい「セブン・デイズ」後にストーンズのロン・ウッズがレコーディングしています。

・Bob Dylan “Sukiyaki (曲名非通知)” (1986) — “Positively Fareast” より

ディランが最初に来日したのは七八年の三月で、私はちょうど入試にあたっていました。コン

を根に持っていたようで、八〇年代になってザ・バンドが使ってたマリブの「シャングリ・ラ」スタジオで録音し、しかもガース・ハドソンをミュージシャンに使ったんです。アルバムの名前も「Shangri-la」にし、酒も断って録音に臨みました。私は拓郎さんのアルバムでこれが一番好きなんです。この曲でもガース・ハドソンの例のサククスが出てきます。「男の夢を叶わさん」という拓郎さんの詩を思い起こします。

・吉田拓郎「ある雨の日の情景」(1972) — 自演 with 森田節

お粗末様でした。森田さん、ありがとうございます。

・吉田拓郎「永遠の嘘をついてくれ」(1995) — 『Long Time No See』より

拓郎さんはずっとくすぶっていて、これで引退だと何度も言っていました。その時、若い頃に拓郎さんの追っかけをしていた中島みゆきさんが、「もっとしっかりせんか。年を取っても頑張るのだから。かつては自分の憧れだったあんたは、嘘をつくならずっとつき通してくれ。」という歌を与えました。後につま恋で二人はデュエットしています。この曲は、東京・ニューヨーク・上海が舞台なのもポイントですね。資本主義の権化のニューヨーク、革命が起こった上海というのは、七〇年代を生きた方には、特別な意味があると思います。

・中島みゆき「おまえの家」(1978) — 『愛していると云ってくれ』より

みゆきさんというと、恋に破れた女の歌が多いイメージがあるんですが、もっと感動するのは夢に破れた男に対して歌った歌です。我々も同じことで、ヤクザな世界に身を投じて、夢を見ている途中かも知れないんですが、いずれ醒めることもあるかもしれない。その時、このような鎮魂歌(レクイエム)を歌ってもらうには、それなりの人生を歩んでないといけないんだなあという感じですね。

・小林麻美「月影のパラノイア」
 (1984) — 『Cryptograph』愛の
 暗号』より

実は一番好きなのは小林麻美さんです。最後はこれをどうぞ。

なお、しゃべる時間が長くなり過ぎて、実際にはかけられなかったが、当日は他にも、以下のCDを持ち込んでいた。特に退屈なマル・ウォルドロンの「ファイアー・ワルツ」が、同じエリック・ドルフィーをソロイストにしていながら、一週間後には素晴らしい演奏に変貌したことなど、語りたいたくさんある。いずれどこかで語る日が来ることを願ってやまない。

- ・Mal Waldron “Fire Waltz” (1961) — “Quest” より
- ・Eric Dolphy “Fire Waltz” (1961) — “At The Five Spot Vol. 1” より
- ・Dixie Straits “Sultans of Swing” (1984) — “ALCHEMY” より
- ・石川セリ「ダンスはうまく踊れなく」(1977) — 『気まぐれ』より

(国際日本文化研究センター教授)



私の中の日文研

御厨 貴

この三年、日文研の客員教授としてお世話になった。最初の二年間（二〇一二・四・二〇一四・三）は、「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」と題する共同研究を率いて、合計一回の研究会を、人の余りいない土曜日に行った。幹事の井上章一さんが、東京から上洛する研究者が多いため、アフターの場所を工夫してくれたり、最後には自らピアノリサイタルを赤鬼で開いてくれたり、サービスにこれ努めてもらったことが、印象に残っている。これをうけて三年目（二〇一四年度）は、研究成果をブックスタイルに仕上げるため、全員が研究論文の執筆に集中した。おかげ様で、二〇一五年三月末には、『建築と権力のダイナミズム』というタイトルの論文集が、岩波書店から刊行される。出版の暁には、一同打揃って是非花の都で祝賀の宴を催したいと願っている。

何だか生真面目なつまらぬ報告書の文体になってしまった。いかん、いかん、これではいかん。実は私と日文研との付き合いは、けっこう古くからあるし、日文研に関わる研究者との交流も意外に深いものがあるのだ。ただどれもこれも、これというカタチになったコトが余りないものだから、つい今回は力んで「これだけやりました」みたいな書き出しになってしまった。スママセン。

そもその縁は、一九九〇年代前半の山折哲雄さんとの出会いに始まる。最初に相見えたの

は、日文研ではない。読売新聞の読書委員としてであった。あの頃の読書委員会は、日野啓三、養老孟司、鷺田清一といった個性豊かな人物が多く、委員会そのものも面白かったが、異業種混交のシンポジオンとなるのは、アフターの時だ。今は無き旧パレスホテルの1Fのラウンジを占拠してのオシャベリは談論風発でとても楽しかった。なかでも老若を問わず誰彼かまわず座談の渦に巻きこんだのが、山折さんその人だった。宗教学者として無類に愉快な人だった。いつのまにか、「御厨さんは面白い。」「それいいよ」「どこかで発表したら」と常に前むきの山折さんに、硬軟色んな所にひっぱり出され、『共演』と相成った。そのうち最も印象に残るのが、日文研の山折さんの共同研究「日本人はキリスト教をどのように受容したか」に、ゲスト報告を頼まれた時のことだ。読書委員会アフターで、山折さんは「大平さんはクリスチャンでしょう。それあなた報告して」と言われた。一瞬虚をつかれた感があった。「クリスチャン宰相大平正芳の政治哲学」という苦しまぎれの題をつけ、知る人も少なく京都駅からエライ遠い所に参上し、ごによごによ語った覚えがある。その時驚いたのは、森岡正博という若い人が、「尾崎豊」をテーマに彼の歌声と共に報告をしたことだった。山折さんって本当にめちゃめちゃ広い人だなと感心した。ここで私は島田裕巳さんと運命の出会いを経験する。まだサリン騒動で日本女子大を追われるギリギリ前のこと。そしてここでの出会いから、断続的に島田さんとつき合い、やがて東大先端研の特任研究員として、「安全・安心」のプロジェクト研究に携わってもらうことになった。

さて山折さんの後日談。数年たって山折さんから報告書にするので、私の「大平クリスチャン宰相論」を原稿化せよとのお達しだ。さて困った。記憶にないのだ、報告の内容が。そこで一生懸命家捜ししたのだが、レジュメや資料の類もどこへ行ったものか、まったく出てこな

い。万事休す。大枝山のタヌキ（いるかどうか知らぬが）に化かされましたと訴えたら、山折さんが「そうか、それではしようがない」と妙に納得したので、これまたビックリだった。

次の縁は、木村汎さんである。一九九七年から四年間の「危機管理と予防外交」というテーマの共同研究に誘われた。このたびはより主体的な参加を求められ、客員教授となった。参加意欲はあったものの、ちょうど私が都立大法学部から新設の政策研究大学院大学に移る最中で、上洛がままならず、木村さんには迷惑をかけた放しだった。でもここで、原彬久さんや土山實男さんと顔見知りになったので、私は随分と得をした思いがある。木村さんの『おもてなし』の精神はすごかった。日文研は不便な所にあるからと、自宅を開放して奥様まで動員して我々にご馳走して下さったり、気のきいたレストランまで車を跳ばしたりと、それはそれはの気遣いであった。だから欠席がちとなっても、食い逃げはいかんと自らに言い聞かせ、今回は負しながらも成果を出した。「危機管理コミッティとしての復興委員会―『同時進行』オーラルの『ファイル』をめぐる―」が、木村汎編『国際危機学』（世界思想社、二〇〇二年）に収められた。ホッと安堵である。

ちょうどこの二十世紀末に重なるカタチで、小渕首相肝いりの「二一世紀日本の構想懇談会」が設けられ、私もその末席を汚がした。座長には日文研二代目所長の河合雄雄さんが就き、一夜山王下のイタリオンを貸し切って、我々ペーペーの研究者と事務局の若手官僚をもてなして下さったことが、強く印象に残っている。ここでは、ダジャレの名人の真骨頂を發揮された。座は常に笑いで満たされていた。河合さんはじつにさりげなく私に「日文研、お見捨てなきよう」と言われた。ああこの方はすべてお見通しだと背筋がゾクッとした。

しばしそれから時が経過する。三度目の正直となったのは、二〇一〇年も末のこと。時は熟

せりとばかり今度は私の方から打って出た。阪大時代から交流のあった旧知の猪木武徳所長に、六〇才で東大先端研をやめるので、日文研客員教授に応募して「建築と政治」のプロジェクトをやりたいと、率直に申し出た。猪木さんはたちどころに手を打ってくれて、無事に採用になったのが、冒頭の話ということになる。猪木さんは、これまた人文研時代から旧知の井上章一さんを幹事にと手筈を整えてくれた。一年先の退職を前に、今度こそと決意を新たにしたら。しかし人の運命とはわからぬものだ。その前に日文研の神様との出会いが生まれたのだから。そう、三・一一だ。あの東日本大震災がおこった。四月に菅首相は「復興構想会議」を創設。木村さんの報告書に阪神淡路大震災の「復興委員会」のことを書いたせいか、運命のイタズラとはこのことか、私は五百旗頭真議長に頼まれ、議長代理を命ぜられた。すると、日文研創設者の梅原猛さんが何と名誉議長に特別顧問として参加されると分かった。まずはどう接しているのか、皆目見当がつかなかった。五百旗頭さんは『神様』と公然と名づけられたが、果たして如何。とにかく梅原さんの登場は強烈だった。「文明災としての東日本大震災」と言うてさながらスーパー歌舞伎の大御所的存在として臨まれ、会議は千波万波の波の間に間に揺れ動いた。ありていに言って、梅原さんは五百旗頭―私―飯尾潤の政治学トリオに飽き足りないものを感じておられたのだ。

「提言の文章は、社会科学者ではダメ。あの手の文体では人の心を打たぬ」。これが梅原さんの一貫した態度だった。これを無視は出来ない。そんな中、成りゆきから私が起草者に。うむ。果たして梅原さんの試験に合格する文章なんて書けるのか。役人用語でダメなのは分かるが。六月の一日から一週間、私は深夜に起きて文章を練り、昼間は事務局での調整にあたる日々を過ごした。仮想敵、いや実際に私の前に対峙しているのは、梅原神様なのだから。ツキ

モノが付くためには、夜遅くでなければ無理と、強迫神経症的に思いこむようになっていた。これはしたり、梅原神様が乗り移ったのか否か。

馬原神様に代表される会議の文人派の「思い」をいかに「提言」に生かすか。私はついに割り切った。これは「詩のリズム」でいくしかない。書き上げた「提言前文」を、会議の前日に事務局から梅原さんに祈るような気持ちで送った。すぐにご嘉納になった。「これでよし」と。翌日、梅原さんは会議に臨んで「古風で大時代的だが、社会科学者に詩が書けるとは思わなかった。」やはり一人で書いて御厨節を通してよかった。「八十点」との御託宣。晴れて日文研の神様から合格証をもらえた。実は本番の会議でも、私が詩のリズムでこれを音読した。梅原さんへの挑戦のおかげで、私は政治は演技であり、舞台で演じられるものであるコトを自ら体験することができた。

その後、一年がたち、日文研のプロジェクトのため上洛の機会は多くなったが、梅原さんにはお会いしてない。神様とのやりとりはまさしく一期一会だったとの思いがずっと心に残っているからだ。とまれ、私の中の日文研はふり返って見ると、ずしりと重い存在感を持っている。ずっと外縁に連なってきたが、その日文研卒業の日も近い。プロジェクトの論文集が出来上がったら、「ありがとう、そしてさようなら」と、人っ子一人いない日文研の回廊でつぶやいてみたい。

(国際日本文化研究センター客員教授)

センター通信

外国人日本文化研究者データベース作成プロジェクト
『日本研究 外国人研究員名簿 一九八七〜二〇一三年度』刊行の楽屋裏

宮崎 康子

海外研究交流室に特任助教として着任して以来、外国人日本文化研究者データベース作成プロジェクトに従事しています。その一環として『日本研究 外国人研究員名簿一九八七〜二〇一三年度』を二〇一三年度末に刊行しました。

この冊子の目的は、日文研の研究者が海外で研究交流を行う際に、訪問国の日本文化研究者を確認することにあります。したがって、当時の室長（劉建輝教授）と相談して、国

籍ではなく、二〇一三年度当時の所属機関の国別に編集しました。専門分野、研究テーマ、最終学歴・学位、日本での学歴・研究歴、日文研在籍期間と研究テーマ、日本語での最新業績二本、所属学会等を掲載しています。現在進行形の研究交流に必要な内容ばかりです。改良の余地も多々あるのですが、冊子形式では初の成果物ということもあって、意外な好評をいただきました。この冊子作成に関わる楽屋裏を少しご紹介したいと思います。

日文研は「国際日本文化研究センター」という名前の通り、世界の日本研究者のための交流拠点です。交流のある研究者は、一九八七年の設立以来かなりの数にのぼります。

作業を始めてまず、全体像を把握することに苦労しました。なにしろ膨大な量のデータがばらばらに残されているので

す。諸データをエクセルにおとすと、外国人だけで一万人を超えており、各人に関する入力項目は一五〇以上ありました。打ち出せば項目だけでA3用紙が横に十枚つながりません。これ以外にも、資料の電子化が進む以前のデータは、紙資料のみがA4のドッジファイルやマニラファイルにはさまれて、キャビネットに一部屋分ありました。

プロジェクトには、中国からの留学生で大学院生の栄元さんと、専任の黒住千佳さんという心強い仲間がいるのですが、どこから手をつけていいのやら、何年かかるのだろうと、三人で呆然となりました。

ところで、日文研では外国からの研究者の受け入れに際して、「外国人研究員」と「外来研究員」とに区分しています。前者は給与有で、後者は他の財源によって滞在する研究者です。いずれも当該年度の所属機関が日本以外であれば、日本人であっても外国人であり外来となります。滞在期間は数日から一年間と様々で、お名前も変わって複数回来所される方が少なくありません。来所時の書類をもとに記録を作成するため、現在時での有効性が低く、追跡調査の過程でややこしい事例に出会うことが多々ありました。

個人情報申告制です。姓名には英語表記とフリガナをつ

けてもらうのですが、来所の度に微妙に変わる方がいらっしやるのです。たとえば、「王」さんであれば、「ワン Wang」さんであったり「ウォン Wong」さんであったりと、データ上は違う人物として処理されてしまうことになるわけです。同一人物なのかどうか、慎重を要して人物を特定する作業に数日を要したこともありました。困りはてて、古参の教員に相談してあっさりと同じ人物だとわかりました。膨大な記録よりも個人の記憶が有効なことがあるのだと感じた瞬間でした。別の例だと、アルファベットでも漢字でもない言語が母国語の方も大勢いらっしやるので、ネット検索がうまくできなかつたり、同姓同名で全くの異分野での著名人の経歴がヒットしたりします。退職されていたり、国をまたいで所属先が変更していたりする場合の追跡調査はかなり困難です。和むこともありました。同時期に滞在されていた研究者同士が、帰国後にご結婚されていることを見つけたときは、歓声があがりました。

その他、亡くなられていることがわかれば黙祷し（二〇名）、大きな賞や勲章の受賞者（二九名）や高名な著述家、メディアでおなじみの評論家等が日文研と深く関わっていると知れば、驚き、深く納得もしました。

年中行事

児嶋 さなえ

完成した冊子には、外国人研究員三五八名（四三ヶ国）のデータを収録しました。一人から随分と小規模になりましたが、彼らは、一年近くを敷地内にある宿舍で生活し、日文研に日勤し、専任教員とつねに一緒に研究を行っています。流暢な日本語はさらに磨かれ、日本人よりも巧みに日本語を駆使し、古文を難なく読み解き、日本文化の神髄を日本人に説くという、まさに国際的な日本文化研究者が熟成されていくのです。冊子作成は、この過程を辿る作業なのです。

現在は、新室長（瀧井一博教授）のもとで事務の大倉礼さんにも手伝ってもらい、更新版『日本研究 外国人研究員名簿』と『日本研究 外来研究員名簿』刊行に向けて、作業を進めています。今年度は外国人・外来研究員合わせて、すでに二〇ヶ国／五〇名以上が来所（予定）です。これは二八名の専任教員の倍近い人数です。

実は、わたしの専門は教育哲学・教育人間学で、このプロジェクトとは一見無関係なのですが、作業の過程で、日本文化の沃野に触れ、日本文化研究に魅せられた人人生の悲喜交々を垣間みることができ、遣りがいのある人間学的なプロジェクトであると感じています。

（国際日本文化研究センター特任助教）

仕事納めからあえて考えないようにしていた、年度末までの三ヶ月間にやるべき仕事を頭の中でスクロールして、「できれば来年はもうちょっと気楽に年始を迎えたい…」と思いつつ、四、五年が過ぎてしまった。

私は、研究協力課・研究支援係に所属する「研究支援プロジェクト員」である。

研究支援係の業務は、大きく分けると①日文研・共同研究会に関する業務、②総合研究大学院大学（総研大）に関する業務、③外部資金に関する業務の三つに分類される。

「研究支援プロジェクト員」の主な業務内容は、③外部資金に関する業務であり、外部資金や外部資金的な性格をもつ経費の公募・採択後の各種事務手続き、研究推進方法に関する相談、研究終了時の研究成果報告提出にいたるまでの研究者のお手伝いなどである。文字にしてみるとごく簡単な業務内容なのにどうして毎年、平穩なお正月を迎えられないのだろうかと思うのだが、残念なことに平成二七年の始まりもま

た気がついたら左胸をさすっていた。

外部資金に関わる部署ではこの研究機関でも同じようなものではないかと思うが、一年の仕事のサイクルとして二度、仕事の山が来る。一月から三月にその年度の研究費の大多数を支出完了し、報告書の作成準備にとりかかる。四月は報告書の完成に向けた手続きと同時進行で翌年度の新しく採択された研究費の申請書の作成を始める。五月に入ると前年度の報告書を提出しつつ、翌年度採用の日本学術振興会特別研究員の採用応募手続きをすることになる。そして六月に最終報告書を提出するとやっと落ち着き始め、一つ目の山を越えたことになる。

もうひとつの山が九月から十一月にかけての科研費等の応募時期である。公募説明会に始まり、毎年更新される電子申請システムと格闘している研究者からの問い合わせに対応し、順次提出されてくる申請書をチェック、修正の依頼をする。二回から三回程度の修正とチェックを繰り返し、無事最終提出となる。

実は、この二つ目の申請の山と年度末に始まる執行の山には連続性がある。

科研費等の研究費の多くは四月に立ち上げ三月に当該年度

の研究を終了させることになる。このサイクルにあわせて研究者が無理・無駄なく研究を実施し、当初予定していた研究目標や研究成果にたどり着くためのお手伝いをするには、年度末の三ヶ月に入る前にそれぞれの研究費と研究課題の特性を把握しておく必要がある。

それぞれの研究課題の特性を把握する方法として最も重要な情報源となるのは、応募申請時に研究者が作成した計画調書や申請書である。もちろん研究継続中に各年度提出する書類も研究の経過を知る上でとても重要ではあるのだが、計画調書や申請書には、研究期間全体を通じた研究目標と研究方法及び、その研究目標を達成するための予算執行計画が記載されている。実際に採択されて研究を開始してみると想定していなかった事態にぶつかるともあれば、調査してみたら新たな発見があり研究方法の見直しをせざるを得ないということもままあることなので、応募申請時の書類に記載されていることすべてがその後の研究期間を通じて参考となるわけではない。しかし、計画調書や申請書の多くは十数ページにおよぶ大作であり、そこには研究者が自分の今後数年間の研究について真剣に考え抜いて練り上げた内容が詰まっている。

計十年ほど科研費をはじめとしたいろいろな研究費の応募書類を見てきたが、採択される申請書というのは、各設問に的確に回答を示し、最後まで読み切るとおおよその研究全体のイメージがすっと自然に頭に入ってくるものが多い。そのためには「申請書を書くテクニク」を必要とするが、申請書を書き慣れていない若手研究者の場合、記載する箇所が間違っている、同じことが繰り返して記載されているといったテクニク不足の申請書が散見される。こういった申請書であっても簡単なコメントをつけて修正案を提案すると、同一人物が書いたとは思えないほど劇的に完成度の高い申請書として戻ってくることもある。この劇的な変化を個人的に「爆ぜる」と呼んでいるのだが、この場合、単に形式が整っただけでなく、その研究者の中にあつた「こんなことを突き詰めて研究したい」と内のために爆ぜた強い思いが申請書に反映されていることが多く、まさに爆ぜた申請書となる。爆ぜた申請書に出会えた時、ふわっとその研究の世界に誘いこまれることがある。もちろん研究者でもない事務職が理解できている範囲はとて狭いと思うが、この研究をもっとたくさんのの人に知ってもらいたい、ぜひ実現してほしいという気持ちを込めて最終提出ボタンを押すことになる。

若手を脱した先生方の書く申請書はすでに個人のスタイルが確立していることが多く、若手研究員のように根本的な修正をお願いすることはまずないのだが、時に同じように誘い込まれる申請書に出会えることがある。最初は実現不可能な壮大な夢の話が書かれているのかと思ってしまうのだが、申請書としての形が整っていると夢は夢でもゴールへの道筋がぼんやり見えてくるのである。

夢の申請書に出会えた時、この仕事をしていてよかったなあと心から思いつつ、無事採択されることを祈る。それと同時に採択されたら大変だなあ、でもどうにかへし折れず実を結ぶようにお手伝いしないと……とも思うのである。

今日も応募申請時の書類を思い出しつつ、年度末の山の上り坂を上っている。研究者の意向をふまえて、あちこちの部署の事務担当者と執行について相談とお願いに長い通路を往復するのだが、研究支援係の仕事の大半は、研究者と一緒に考える、考えた結果を次の部署へ橋渡しをすることだと思う。六年間で応募申請から最終報告書提出まですべての手続きをお手伝いできた研究課題もあれば、来年以降、次へバトンタッチする研究課題もある。研究者が新しい研究を進めようとする最初の段階から成果を出す過程のほんの一部であっ

でも携わることができたことは本当に運がよかったと感じる。研究者の方々には失礼なことをお願いしたことも、ご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思うが、最後に失礼を顧みずひとつ付け加えるならば、最近、日文研では出会う機会が少なくなってきた夢の申請書がおもむろに登場して外部

資金担当を困惑させつつも、爆ぜる申請書として世の中に出ていくのをこっそり期待しているのである。

(国際日本文化研究センター研究協力課
研究支援係研究支援プロジェクト員)

共同研究

(二〇一四年四月一日～九月三〇日)

昭和戦後期における日本映画史の再構築

(研究代表者 谷川建司、幹事 細川周平)

[共同研究員名]

晏妮、板倉史明、井上雅雄、小川順子、木下千花、木村智哉、河野真理江、須藤遙子、富田美香、中村秀之、西村大志、柳下毅一郎、北浦寛之、長門洋平

[海外共同研究員]

ミツヨ・ワダ・マルシアアノ

[研究発表]

〈第一回研究会〉

二〇一四年四月二六日

ミツヨ・ワダ・マルシアアノ「X年後…米国パブリック・

ディプロマシーと戦後原子力映画」

須藤瑠子「自衛隊等協力映画研究——一九五〇～六〇年代を中心に」

谷川建司「海外輸出向けコンテンツとしての怪獣映画と日本映画輸出振興協会の活用」

本映画輸出振興協会の活用」

井上雅雄「ポスト占領期における映画産業と大映の企業経営」

小川順子「東映スター中心主義とファンとの関係が作り出

した功罪…市川右太衛門から大川橋蔵へ」

富田美香「一九五〇年代京都における映画興行の様態——

アトラクションつき興行を中心に(仮)」

長門洋平「初期角川映画のメディア戦略とレコード産業

——薬師丸ひろ子を中心に(案)」

木下千花「映倫の成立と妊娠映画(映倫の改組と業界内自

主規制の論理)

中村秀之「映画批評と映画産業の関係についての知識社会学的研究——一九五〇年代後半から六〇年代前半における佐藤忠男の活動を中心に」

板倉史明「一九六〇年代におけるスタジオシステムの崩壊と諸ジャンルの勃興」

北浦寛之「映画会社のテレビを利用した不況対策」
晏 妮「昭和戦後期の新東宝映画とアジア（中国、香港）」

柳下毅一郎「大蔵貢と新東宝映画に見る大衆感覚」

河野真理江「『リバイバルもの』と『看護婦』」

西村大志「サラリーマンへの憧れとその喪失——観客のまなざしを通して——」

二〇一四年四月二十七日

デイスカッション

〈第二回研究会〉

二〇一四年六月二十八日

板倉史明「一九六〇年代後半から一九七〇年代におけるピ

ンク映画の製作体制——神戸映画資料館所蔵の葵映画資料を活用して」

須藤遙子「一九五〇〜六〇年代の『自衛隊協力映画』途中報告……」

二〇一四年六月二十九日

井上雅雄「日活の製作再開と『五社協定』——ポスト占領期における企業間競争の変化——」

〈第三回研究会〉

二〇一四年八月三〇日

谷川建司「海外輸出向けコンテンツとしての怪獣映画と日本映画輸出振興協会（輸振協）の活用」

木下千花「映倫改組と妊娠映画（業界内自主規制と外国映

画配給）」

二〇一四年八月三十一日

河野真理江「リバイバルもの——リメイク、アダプテーション、『看護婦』」

人文諸学の科学史的研究

（研究代表者 井上章一、幹事 瀧井一博）

〔共同研究員名〕

今谷明、上島亨、上村敏文、鴉飼正樹、内田忠賢、長田俊樹、小澤実、小路田泰直、斎藤成也、佐藤雄基、関幸彦、

高木博志、高谷知佳、竹村民郎、玉木俊明、鶴見太郎、永岡崇、林淳、シルヴィオ・ヴィータ、藤原貞朗、安田敏朗、若井敏明、荒木浩、伊東貴之、大塚英志、倉本一宏

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年七月二四日

永岡 崇「教祖と欲望の系譜学―異端 特高 変態心理」

林 淳「高取正男と宮田登―アカデミック民俗学の東西」

二〇一四年七月二五日

上村敏文「ルターの宗教改革から無教会まで―プロテスタントを中心として」

井上章一「宗教を人文諸学はどうあつかってきたのか―考

古学と建築史を中心に」

戦争と鎮魂

〔研究代表者 牛村 圭、幹事 ジョン・ブリン〕

〔共同研究員名〕

今泉宜子、岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、金志映、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、吉井

文美、吉田（古川）優貴、稲賀繁美、倉本一宏、末木文美士、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、徐載坤

〔海外共同研究員〕

平松隆門、堀まどか

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年七月二六日

討論「『戦争と鎮魂』をめぐる」

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討

〔研究代表者 劉 建輝、幹事 北浦寛之〕

〔共同研究員名〕

安藤潤一郎、井村哲郎、上垣外憲一、岸陽子、呉孟晋、小林茂、姜克実、白幡洋三郎、鈴木貞美、戦暁梅、单援朝、塚瀬進、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、伊東貴之、稲賀繁美、井上章一、松田利彦、森洋久、石川肇、陳其松

〔海外共同研究員〕

王中忱、徐興慶、孫江

〔所長裁量経費による招聘研究員〕

吳京煥、蔡敦達、鄭在貞、陳凌虹、林志宏、柳書琴

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年七月一日

小林 茂「東アジアにおける『帝国地図学』(Imperial

Cartography)の展開と外邦図」

根川幸男「画像資料から見る近代日本の南米移民」

二〇一四年七月一二日

秦 剛「中日の知をつないだ上海内山書店」

総合討論

夢と表象―その統括と展望

〔研究代表者 荒木 浩、幹事 マルクス・リュッターマン〕

〔共同研究員名〕

安東民兒、池田忍、入口敦志、上野勝之、鍛治恵、加藤悦子、河東仁、木村朗子、笹生美貴子、仙海義之、高橋文治、立木宏哉、玉田沙織、林千宏、平野多恵、福島恒徳、藤井由紀子、松園斉、松本郁代、箕浦尚美、室城秀之、伊東貴之、倉本一宏、早川聞多、榎本渉、郭南燕、丹下暖

子、中川真弓

〔海外共同研究員〕

ヨーク・B・クヴェンツァー、アイヴ・コヴァチ、李育娟

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年七月一三日

ゲルガナ・ペトコヴァ「日本本格昔話における夢…その分類と役割」

おたく文化と戦時下・戦後

〔研究代表者 大塚英志、幹事 北浦寛之〕

〔共同研究員名〕

浅野龍哉、板倉史明、内田力、大野修一、香川雅信、菊地暁、キム・ジュニアン、木村智哉、嵯峨景子、須藤遙子、鶴見太郎、富田美香、中川讓、藤岡洋、細馬宏通、牧野守、室井康成、山本忠宏

〔海外共同研究員〕

秦剛、マーク・スタインバーグ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月二四日

大塚英志「デイズニーとエイゼンシュテインの野合」

秦 剛「鉄扇公主と東アジアアニメーション研究」

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月二〇日

山本忠宏「昭和初頭の児童まんが作品における『見開き』
と『カメラ』―田河水泡『のらくろ』と大城のぼる
『汽車旅行』を中心に―」

『汽車旅行』を中心に―

牧野 守「映画学と資料」

聞き手・大塚英志

昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化的分析

―ザ・タイガースの研究

〔研究代表者 磯前順一、幹事 井上章一〕

〔共同研究員名〕

浅尾雅俊、飯田健一郎、小野善太郎、黒崎浩行、永岡崇

中村俊夫、藤本憲正、松本清、水内勇太、倉本一宏、細川

周平、北浦寛之、エリザベッタ・ポルク、光平有希

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年四月一九日

黒崎浩行・中村俊夫「単行本の企画について」

小野善太郎・黒崎浩行「ザ・タイガース／ディスコグラ

フィーおよびコラムについて」

水内勇太「ファン投票にみるザ・タイガース」

飯田健一郎「ザ・タイガースをめぐる京都歩き」

黒崎浩行・飯田健一郎・水内勇太「雑誌記事目録作成につ

いて」

光平有希「ザ・タイガースと平和思想」

〈第二回研究会〉

二〇一四年六月一四日

黒崎浩行・中村俊夫「単行本の企画について」

磯前順一「ザ・タイガース研究史」

小野善太郎・黒崎浩行「ザ・タイガース／ディスコグラ

フィーおよびコラムについて」

水内勇太「ファン投票にみるザ・タイガース」

光平有希「ザ・タイガースと平和思想」

磯前礼子「ザ・タイガースのコスチュームについて」

北浦寛之「ザ・タイガースの映画について」

浅尾雅俊・エリザベッタ・ポルク・安仲佳代「ザ・タイ

ガース研究文献解題

〈第三回研究会〉

二〇一四年八月二日

黒崎浩行・磯前順一「出版について」

磯前礼子「ザ・タイガースの衣装の変遷について（完成版）」

版）」

北浦寛之「ザ・タイガースと映画について（完成版）」

光平有希「ザ・タイガースと平和思想（完成版）」

浅尾雅俊「ザ・タイガース研究文献（完成版）」

水内勇太「人気投票に見るザ・タイガース（完成版）」

小野善太郎「ザ・タイガースとザ・フォーク・クルセダーズ（完成版）」

ズ（完成版）」

黒崎浩行・飯田健一郎「京都歩きの完成に向けて」

黒崎浩行・水内勇太・飯田健一郎・光平有希「ザ・タイガース紙媒体露出記録リスト（完成版）」

ガース

黒崎浩行・水内勇太・飯田健一郎「ザ・タイガース年譜」

小野善太郎・黒崎浩行「デイスコグラフィー」

磯前順一・中村俊夫「原稿について」

日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―

〔研究代表者 黄 自進、幹事 劉 建輝〕

〔共同研究員名〕

相澤淳、浅野豊美、家近亮子、井上寿一、王柯、加藤聖

文、黒沢文貴、小菅信子、佐藤卓己、澁谷由里、姜克実、

鈴木多聞、田嶋信雄、段瑞聡、戸部良一、波多野澄雄、服

部龍二、馬曉華、松浦正孝、松重充浩、劉傑、鹿錫俊

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年七月五日

浅野豊美「ミャンマーから見た日中戦争―北ビルマ・雲南

戦線と一号作戦の関係を中心に」

黄 自進「満洲国成立初期における社会的基盤」

二〇一四年七月六日

段 瑞聡「盧溝橋事件と日中戦争の全面的展開―『蒋介石

日記』から読み解く」

加藤聖文「日中戦争と満洲国の対応―日滿支経済ブロック

の破綻―

〈第二回研究会〉

二〇一四年八月三〇日

相澤 淳「日中戦争の展開と日本海軍」

姜 克実「小寨村襲撃についての実証的研究—『平型関大捷』の真相に迫る」

二〇一四年八月三一日

劉 傑「日中の相互認識と日中戦争—外交官を中心に」

鈴木多聞『近衛日記』について—近衛文磨と日本の『終戦』

日本仏教の比較思想的研究

〔研究代表者 末木文美士、幹事 稲賀繁美〕

〔共同研究員名〕

阿部仲麻呂、井上克人、魚住孝至、岡本貴久子、冲永宜司、嘉指信雄、坂井祐円、坂本慎一、佐藤弘夫、島蘭進、ミシエル・ダルシエ、永井晋、中島隆博、西平直、西村玲、モリー・ヴァラー、シルヴィオ・ヴィータ、藤田正勝、前川健一、吉永進一、米田真理子、阿部泰郎、滝澤修身、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ジェームズ・マーク・シールズ、アントン・セビリア、高橋勝幸

〔海外共同研究員〕

アンナ・アンドレーワ、鄭滢、許祐盛

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年四月二六日

井上克人「正中の宗論とその背景」

永井 晋「〈東洋哲学〉とは何か—〈禅〉から〈密教〉へ—」

ハヨ・クロンバッハ「World Philosophy and International Peace in the Context of the Axial Age」

〈第二回研究会〉

二〇一四年六月一四日

シンポジウム「日本仏教批判」

末木文美士「趣旨説明」

ジェームズ・マーク・シールズ「仏教と唯物論の再考」

松本史朗「京都学派の仏教理解について—批判的考察—」

ブライアン・ビクトリア「護国仏教は仏教やいなや？」

コメント…佐々木閑

討論

総括…山田奨治

〈第三回研究会〉

二〇一四年九月二〇日

岡本貴久子「帝都復興と『記念植樹』—近代造林学にみる

緑化の方法とその思想―

パネル「中世の身体論」

司会・末木文美士

阿部泰郎「中世顕密仏教における宗教的身体―五藏曼荼羅と管弦音義―」

米田真理子「栄西の思想に見られる宗教的身体観―『喫茶養生記』を中心に―」

コメント・魚住孝至「近世思想の立場から」

コメント・嘉指信雄「近代哲学の立場から」

討論

二一世紀一〇年代日本文化の軌道修正…過去の検証と将来への提言

〔研究代表者 稲賀繁美、幹事 牛村 圭〕

〔共同研究員名〕

テレングト・アイトル、今泉宜子、鵜戸聡、大西宏志、岡本光博、小川さやか、小倉紀蔵、鞍田崇、呉孟晋、小崎哲哉、孤田真介、近藤高弘、澤田敬司、白石嘉治、戦暁梅、全美星、多田伊織、千葉慶、張競、中村和恵、西田雅嗣、西原大輔、二村淳子、波嵯栄ジュニファしょう子、橋本順

光、林洋子、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、シルヴィー・ブロッソー、松原知生、クリストフ・マルケ、三原芳秋、本浜秀彦、山中由里子、山本麻友美、與那覇潤、マシュー・ラーキング、李建志、滝澤修身、山田奨治、劉建輝、磯前順一、榎本渉、フレデリック・クレインス、森洋久、王成、長門洋平、朴美貞

〔海外共同研究員〕

大橋良介、デンニツァ・ガブラコヴァ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年四月一九日

討議「稲賀繁美『絵画の臨界…近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、二〇一四年一月一四日刊行」

討議「服部正・藤原貞朗『山下清と昭和の美術「裸の大將」の神話を超えて』名古屋大学出版会、二〇一四年二月一五日刊行」

討議「松原知生『物数寄考 骨董と葛藤』平凡社、二〇一四年三月七日刊行」

二〇一四年四月二〇日

二村淳子「美術における『極東』—ラファエル・ペトルツ
チとベトナム美術—」

〈第二回研究会〉

二〇一四年五月一七日

文化における海賊研究の現状について

(一) 歴史的展望…「大航海時代」から「国際法」の成
立へ

(二) 東西商品交易路の確立と金融体制…密貿易の実態
解明へ

(三) 著作権／複製権と「海賊行為」…比較法社会学の
可能性

(四) 商品／情報における「海賊版」研究にむけて

二〇一四年五月一八日

鈴木洋仁「『平成論』をめぐる」

〈第三回研究会〉

二〇一四年六月二二日

稲賀繁美「『時のうつわ・魂のうつし』パリ日本文化会館
公演会・セミナーにむけて」

稲賀繁美「『海賊史観の提唱』version-up版」

中村和恵「オミヤゲ——海賊的領域としての解釈提案」

二〇一四年六月二三日

小倉紀蔵「『絵画の臨界』における躍度あるいは加加速度」

〈第四回研究会〉

二〇一四年七月二〇日

鴉戸 聡「島嶼的…列島・群島・孤島の想像域」

千葉 慶「盗まれた『自画像』—安本末子『にあんちゃん』
と二〇世紀日本の植民地主義—」

橋本順光「触手の移りと写し？ タコとイカの表象をめぐ
る引用と流用」

二〇一四年七月二一日

平松秀樹「タイにおける日本への視線をめぐる—二〇世
紀初頭よりの日本イメージの変遷—」

紀初頭よりの日本イメージの変遷—」

〈第五回研究会〉

二〇一四年九月六日

多田伊織「ネットの海は無法か—インターネットにおける
『海賊』行為について」

白川芳夫「地域でアートをやる—マイノリティ、マーケッ
ト、贈与」

ト、贈与」

林 洋子「美術品の『オリジナリティ』のゆらぎについ
て、考える—再制作、死後鑄造、そして修復」

二〇一四年九月七日

東 悦子「〈渡航案内〉にみる船旅と異文化適応の準備」

根川幸男「戦前期移民船における教育と逸脱」

万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に

〔研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章一〕

〔共同研究員名〕

石川敦子、市川文彦、伊藤奈保子、鵜飼敦子、江原規由、

川口幸也、神田孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳

賀徹、林洋子、増山一成、武藤秀太郎、橋爪紳也、稲賀繁

美、瀧井一博、ジョン・ブリーン、劉建輝、朴美貞

〔海外共同研究員〕

青木信夫、岩田泰、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギル

モンド、徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月一〇日

武藤秀太郎「南洋勸業会、大東亜戦争博覧会、上海万国博

覧会

川本真浩「『他者』との『であい』と『まなざし』——植民

地・インド博覧会（一八八六年、ロンドン）とムカル

ジ

伊藤奈保子「SATSUMAを広げた陶工 第十二代沈壽

官

二〇一四年五月一日

三浦 展「ブリュッセル万博と原字力の平和利用」

井上章一「女看守の時代——コンパニオン前史をふりかえる

——

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月一二日

岩田 泰「上海万博及び麗水万博日本館から見た日本の博

覧会行政

中牧弘允「中空構造で解く千里ニュータウンと大阪万博」

芳賀 徹「岩倉使節団が見たウィーン万博」

二〇一四年七月一三日

武藤夕佳里「並河靖之と万博——並河七宝と巴里庭をめぐる

人々——

ウィーベ・カウテルト「景福宮から朝鮮博覧會場への空間

変貌

堺井啓公「食料」がテーマの二〇一五ミラノ国際博覧会

日本館出展とこれからの我が国の博覧会への取り組み
方針について」

植民地帝国日本における知と権力

〔研究代表者〕 松田利彦、幹事 瀧井一博

〔共同研究員名〕

飯島渉、小野容照、岡崎まゆみ、加藤聖文、加藤道也、川瀬貴也、河原林直人、栗原純、洪宗郁、愼蒼健、通堂あゆみ、長沢一恵、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝、朴暎美

〔海外共同研究員〕

陳延媛、山本浄邦、李炯植

〔所長裁量経費による招聘研究員〕

何義麟、顔杏如、呉叡人、宋炳卷、鄭駿永

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年四月二七日

宮崎聖子「在台ジャーナリスト 田中一二について」

飯島 渉「書評 『地域社会から見る帝国日本と植民地』

第VI章（都市と衛生・娯楽）」

川瀬貴也「植民地朝鮮における天道教幹部の対日協力の論理」

松田利彦「服部宇之吉と京城帝国大学の創設」

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月二七日

山本浄邦「尹雄烈と光州実業学校 東本願寺立光州実業学校設立への協力の背景」

李 昇燁「細井肇とまぼろしの『東方文華大学』」

井上弘樹「杜聡明と台北帝国大学」

林 暎美「服部宇之吉と京城帝国大学支那哲文学科―服部宇之吉の『人脈』を中心として」

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―

〔研究代表者〕 伊東貴之、幹事 榎本 渉

〔共同研究員名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、魚住孝至、恩田裕正、垣

内景子、片岡龍、橋川智昭、権純哲、黒住眞、桑子敏雄、

河野哲也、小島毅、鍾以江、鈴木貞美、関智英、錢国紅、

高橋博巳、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、陳継東、陳

健成、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、末木文美士、ジョン・ブリン、劉建輝、フレデリック・クレインス、山村燧

〔海外共同研究員〕

黄海玉、フレデリック・ジラール、張翔、手島崇裕

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月一〇日

山村 燧「近代日本の陽明学理解」

李 梁「新井白石の漢学と西学―朱子学的『合理主義』と真理概念の普遍性において―」

楊 際開「清末変法から辛亥革命まで―日本の要因を手掛かりとして」

二〇一四年五月一日

片岡 龍「一六世紀後半から一七世紀初めの朝鮮の身心観―李退溪・盧守慎・許浚・張頤光を中心に―」

総合討論

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月二六日

李 亜「梁啓超から見る陽明学と志士精神とのつながり
(一)―尚武」

光平有希「古代中国における音楽療法思想―道教と儒教を中心にして」

手島崇裕「日宋の対外交渉からみた『仏教』

榎本 渉「江戸前期僧侶編纂の思想―明末清初仏教の影響を中心にして」

二〇一四年七月二七日

陳 健成「明代『尚書』研究の文献的な検討」

林 文孝「阮元『論語論仁論』の評価をめぐって」

魚住孝至「近世日本における武道文化の成立過程とその身心―修行的な性格について―中国武術、朝鮮武芸との比較を踏まえながら」

マンガ・アニメで日本研究

(研究代表者 山田 燧治、幹事 荒木 浩)

〔共同研究員名〕

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤慎吾、伊藤遊、岩井茂樹、岡

本健、金水敏、白石さや、西村大志、安井眞奈美、山中千

恵、山本冴里、油井清光、横濱雄二、吉村和真、谷川建

司、北浦寛之、高馬京子、朴順愛、秦剛、小泉友則

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月三十一日

作品検討「山田芳裕『へうげもの』」

紹介者・谷川建司

二〇一四年六月一日

秦剛さんを囲む会

討論「最近の中国でのマンガ・アニメと日本研究をめぐる

状況」

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月一九日

作品検討「矢沢アイ『NANA』（二〇〇〇〜）」

紹介者・高馬京子

二〇一四年七月二〇日

スクリーニング&ディスカッション

上映作品・TVアニメ「ちはやぶる」（二〇一〜二〇一）

新大陸の日系移民の歴史と文化

（研究代表者 細川周平、幹事 瀧井一博）

赤木妙子、アンジェロ・イシ、一政（野村）史織、桑井輝

子、栗山新也、小嶋茂、佐々木剛二、スエヨシ・アナ、高

木（北山）眞理子、滝田祥子、根川幸男、日比嘉高、松岡

秀明、水野眞理子、フェリッペ・アウグスト・ソアレス・

モッタ、物部ひろみ、森本豊富、守屋貴嗣、守屋友江、柳

田利夫、吉田裕美、早稲田みな子、高橋勝幸

〔海外共同研究員〕

エドワード・マック、森幸一

〔共同研究員名〕

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月一〇日

松岡秀明「窓としての短歌…ブラジルの人々は、なぜ日本

の短歌コンクールに応募するのか？」

柳田利夫「ペルー日系社会における『和食』とアイデン

ティティ」

二〇一四年五月一日

森 幸一「サンパウロ市における日本食外食業の成立と変

遷―非日系ブラジル人の受容プロセス―」

スエヨシ・アナ「日本における日系ペルー人の日系人らし

さ VS ベルーらしき」

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月一九日

桑井輝子「アメリカ合衆国短詩型文学考―下山逸蒼を中心
に」

二〇一四年七月二〇日

高木（北山）眞理子「戦前のハワイ島における日系コミュ
ニティの文芸活動―主にヒロ蕉雨会の活動から見る
―」

フェリッペ・アウグスト・ソアレス・モッタ「少年時代の
思い出を書き続けること―半田知雄の少年時代の記述
を中心に―」

〈第三回研究会〉

二〇一四年七月二四日

沖縄県立公文書館見学

移民研究者との意見交換会

二〇一四年七月二五日

レクチャー「沖縄からの近代移民の歴史等」

名護市「ブラジル村」仲尾次訪問、名護市史編纂室外見学

二〇一四年七月二六日

レクチャー「戦後移住の事例」等

日本大衆文化とナシヨナリズム

〔研究代表者〕 朴 順愛、幹事 山田奨治

〔共同研究員名〕

市川孝一、井上祐子、須藤遙子、全美星、竹内幸絵、土屋
礼子、寺沢正晴、油井清光、尹健次、吉田則昭、谷川建
司、朴美貞

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一四年五月一七日

研究テーマ紹介および研究のあらまし発表

二〇一四年五月一八日

朴 順愛「日本のスポーツ・ナシヨナリズム―プロレス
ラー力道山を中心に―」

〈第二回研究会〉

二〇一四年七月五日

資料検討会

二〇一四年七月六日

朴 順愛「三国志と日本文化」

〈第三回研究会〉

二〇一四年八月二日

谷川建司「茶の湯文化の政治性―茶の湯文化をポピュ

ラー・カルチャーで扱うことの政治性」

須藤遙子「産官民のナショナル化…『ガールズ&パン

ツァー』を事例として」

二〇一四年八月三日

竹内幸絵「戦後日本の広告と視覚表現における『日本的

モチーフ』とナショナリズム―一九五〇年代から

一九七〇年まで―」

基礎領域研究

韓国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を旨とした授業を行う。

近世風俗未公開資料解説（継続）

代表者 早川聞多

概要 センター所蔵の近世風俗資料の解説および変体仮名の解説演習を行う。

古文書研究（継続）

代表者 笠谷和比古

概要 前近代の草書文字で記された古文書や日記・記録などの読解を行う。

フランス語運用の基礎／応用（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 フランス語の運用の基礎を実践的に訓練し、あわせて必要に応じて論文講読、仏文論文作成の手ほどきをする。

中国語運用の基礎／応用（継続）

代表者 郭 南燕

概要 研究その他の業務で中国語を必要とする人に対して、中国語運用の基礎を実践的に訓練し、会話、読解、聴解の習得を目的とする。

日本宗教史基礎研究（新規）

代表者 末木文美士

概要 日本宗教史に関する基礎的な問題に関して討議し、必要に応じて重要な文献の講読を行う。

中世文学講読（新規）

代表者 荒木 浩

概要 『方丈記』や『徒然草』など、日本中世文学の文献を、
影印を参照し、英訳などとも対比しながら精読する。

彙報

(平成二六年四月一日～九月三〇日)

人事異動

- ◎平成二六年四月一日 称号授与
名誉教授 白幡洋三郎
- ◎平成二六年四月一日 併任
副所長 井上章一
- ◎平成二六年四月一日 浩
研究調整主幹 荒木
- ◎平成二六年四月一日 山田奨治
研究調整主幹 山田奨治
- ◎平成二六年四月一日 建輝
研究調整主幹 劉
- ◎平成二六年四月一日 山田奨治
情報管理施設長 山田奨治
- ◎平成二六年四月一日 瀧井一博
海外研究交流室長 瀧井一博
- ◎平成二六年四月一日 マルクス・リュック
文化資料研究企画室長
- ◎平成二六年四月一日 採用
教授 坪井秀人
- ◎平成二六年四月一日 契約更新
教授 坪井秀人

(特任研究員)

特任准教授 寺村裕史

特任助教 宮崎康子

◎平成二六年四月一日 契約

(客員)

外国人研究員 朴 順愛(湖南大学校教授)

外国人研究員 ゲルガナ・ペトコヴァ(ソ

フィア大学「聖クリメント・オフリドス

キ」准教授)

外国人研究員 王 成(清華大学教授)

◎平成二六年四月一日 委嘱

(客員)

教授 上野 誠(奈良女子大学文学部教授)

教授 仲万美子(同志社女子大学学芸学部教

授)

教授 橋爪紳也(大阪府立大学二世紀科学

研究機構教授)

准教授 木村直恵(学習院女子大学国際文化

交流学部准教授)

◎平成二六年六月一日 契約

(客員)

外国人研究員 黄 自進(中央研究院近代史

研究所研究員)

◎平成二六年六月三〇日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 マリーナ・コヴァルチュク

(高等師範学校研究員)

◎平成二六年七月一日 契約

(客員)

外国人研究員 王 明珂(スタンフォード大

学客員研究員)

◎平成二六年七月三一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 森 幸一(サンパウロ大学日

本文化研究所所長)

◎平成二六年八月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ファン・ハイ・リン(ハノイ

国家大学人文社会科学大学東洋学部日本研

究科長)

◎平成二六年八月三一日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 朴 曠美 (二松学舎大学客員研究員)

外国人研究員 エリザベッタ・ポルク

外国人研究員 唐 権 (華東師範大学准教授)

外国人研究員 劉 曉峰 (清華大学教授)

外国人研究員 高馬京子 (ミコラスロメリス大学アジアセンター長)

外国人研究員 ファン・ハイ・リン (ハノイ

国家大学人文社会科学大学東洋学部日本研究科長)

◎平成二六年九月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ランジャンナ・ムコパディヤ

ヤ (デリー大学准教授)

外国人研究員 望月みや (ニューヨーク大学

アブダビ校美術研究所准教授)

外国人研究員 アンドリュウ・ガーストル

(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授)

外国人研究員 梁 嶸 (北京中医北京中医薬大学教授)

外国人研究員 ルチアナ・ガリアーノ (カ・フォスカリ大学客員教授)

外国人研究員 朴 正一 (釜山外国語大学校教授)

◎平成二六年九月三〇日 契約期間満了

(客員)

外国人研究員 ハラルド・フース (ハイデルベルク大学教授)

外国人研究員 ゲルガナ・ベトコヴァ (ソ

フィア大学「聖クリメント・オフリドスキ」准教授)

日文研フォーラム

第二七七回「平成二六年四月八日(火)」

発表者 マリーナ・コヴァルチュク (極東連

邦大学助教/日文研外国人研究員)

テーマ 森有礼が見た一九世紀半ばのロシア

帝国——虚像と実像——

コメンテーター 佐野真由子准教授

第二七八回「平成二六年五月一三日(火)」
発表者 秦 剛 (北京外国語大学北京日本

学研究センター副教授/日文研外来研究員)

テーマ 中日の知をつないだ上海内山書店

コメンテーター 劉 建輝教授

第二七九回「平成二六年六月一〇日(火)」

発表者 エリザベッタ・ポルク (ライプ

ティッヒ大学地域研究センター上級研究員

兼講師/日文研外国人研究員)

テーマ 祇園祭について、あらためて考えよ

う「宗教と世俗の間——祇園祭とサルデー

ニャの祭をめぐる」

コメンテーター 小杉源一郎 (公益財団法人

白楽天山保存会理事/株式会社ロマンス

小杉代表取締役社長、細川周平教授

第二八〇回「平成二六年七月八日(火)」

発表者 ジェームス・マーク・シールズ

(バックネル大学准教授/日文研外来研究員)

テーマ 仏教社会主義について——妹尾義郎

と新興仏教青年同盟——

発表者 ブライアン・アンドレー・ヴィクト

リア (オックスフォード大学付属仏教研究

所研究員/日文研外来研究員)

テーマ ナチスと日本宗教
 コメンテーター 末木文美士教授、山田奨治
 教授

第二八一回「平成二六年九月一六日(火)」
 発表者 王 鍵(中国社会科学院近代史研
 究所研究員/日文研外国人研究員)

テーマ 後藤新平研究——中国の視点から
 コメンテーター 劉 建輝教授

木曜セミナー

第二〇六回「平成二六年四月一七日(木)」

話者 大塚英志教授、中島千晴(漫画家)

テーマ 映画式まんが家入門

第二〇七回「平成二六年五月二二日(木)」

話者 宮崎康子特任助教

テーマ 教育哲学としてのバタイユ思想

第二〇八回「平成二六年六月一九日(木)」

話者 長門洋平機関研究員

テーマ 日本映画の音響理論——『映画音響
 論 溝口健二映画を聴く』を中心に

第二〇九回「平成二六年七月一七日(木)」

話者 笠谷和比古教授
 書評者 伊東貴之教授、ジョン・ブリーン教
 授

テーマ 書評 笠谷和比古著『武士道 侍社
 会の文化と倫理』(二〇一四年、NTT出
 版)をめぐる

第二一〇回「平成二六年九月一八日(木)」

話者 ステイリアノス・ババレクサンドロ
 ブロス(アテネ大学教授/日文研外来研究
 員)

テーマ ギリシャでの日本学の発展

テーマ ギリシャでの日本学の発展

Nichibunken Evening Seminar

第一八六回「平成二六年四月三日(木)」

発表者 エリザベッタ・ポルク(ライプ
 ティツヒ大学地域研究センター上級研究員

兼講師/日文研外国人研究員)

テーマ Religion and Community in Kyoto:
 The Gion Matsuri and Chōnakaï

第一八七回「平成二六年五月八日(木)」

発表者 高馬京子(ミコラスロメリス大学ア

シアセンター長、准教授/日文研外国人研
 究員)

テーマ Reflections on "Japanese" Culture in
 Transnational Communication as Seen through
 Representations of "Kawaii"

第一八八回「平成二六年六月五日(木)」
 発表者 マリーナ・コヴァルチュク(極東連
 邦大学助教/日文研外国人研究員)

テーマ Mori Arinori's Journey to St. Petersburg
 in 1866: Images of Western Backwardness
 and Threatening Modernization

第一八九回「平成二六年七月三日(木)」

発表者 ハラルド・フース(ハイデルベルク
 大学教授/日文研外国人研究員)

テーマ Transcultural Encounters: German
 Beer and Meiji Japan

第一九〇回「平成二六年九月四日(木)」

発表者 ゲルガナ・ペトコヴァ(ソフィア大
 学「聖クリメント・オフリドスキ」准教授
 /日文研外国人研究員)

テーマ SuperNATURAL Japan: Digging Out

第一九〇回「平成二六年九月四日(木)」

発表者 ゲルガナ・ペトコヴァ(ソフィア大
 学「聖クリメント・オフリドスキ」准教授
 /日文研外国人研究員)

テーマ SuperNATURAL Japan: Digging Out

第一九〇回「平成二六年九月四日(木)」

the Embedded Cultural Realities in Japanese

Fairy Tales

学術講演会

第五六回 [平成二六年六月二五日(水)]

講演者 北浦寛之助教

テーマ 日本映画の黄金期と斜陽期―テレビ

産業との攻防の中で

講演者 山田奨治教授

テーマ 文化の法律はどう作られるべきか?

―著作権法を例に考える

司会 ジョン・ブリーン教授

第五七回 [平成二六年九月二五日(木)]

講演者 佐野真由子准教授

テーマ 徳川將軍の外交儀礼 一八五七

一八六七

講演者 坪井秀人教授

テーマ 和歌をうたう―モダニズムとジャポ

ニスムをむすぶ和歌歌曲―

司会 瀧井一博教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第一回 [平成二六年九月一九日(金)]

講演者 小松和彦所長

テーマ 妖怪と日本人の想像力

人間文化研究機構公開講演会

第二四回 [平成二六年六月七日(土)]

世界の中の日本研究―京都から語る―

講演者 磯前順一准教授

テーマ 社会史版『ザ・タイガース 世界は

ボクらを待っていた』―戦後民主主義と

高度経済成長―再考

講演者 バトリシア・フィスター教授

テーマ 京都の知られざる皇女尼僧像

レクチャー

第一四三回 [平成二六年五月七日(水)]

発表者 シリモンポーン・スリヤウランバイ

サーン(チュラーロンコーン大学文学部日

本語講座准教授)

テーマ 謡曲における親子に関する表現

主宰者 山田奨治教授

第一四四回 [平成二六年八月二一日(木)]

発表者 ダリボル・クリチュコヴィチ(ペオ

グラード大学准教授/日文研来訪研究員)

テーマ 試練多き道を歩んで…セルビアにお

ける日本学の過去と今

主宰者 末木文美士教授

会議

運営会議

第三四回 平成二六年 六月二七日(金)

調整会議

第二〇九回 平成二六年 四月 二日(水)

第二一〇回 平成二六年 四月一六日(水)

第二一一回 平成二六年 五月 七日(水)

第二一二回 平成二六年 五月二一日(水)

第二一三回 平成二六年 六月 四日(水)

第二一四回 平成二六年 六月一七日(火)

第二一五回 平成二六年 七月 二日(水)

第二一六回 平成二六年 七月一六日(水)

第二一七回 平成二六年 九月 三日(水)
 第二一八回 平成二六年 九月 一七日(水)

センター会議

第二〇九回 平成二六年 四月 三日(木)
 第二一〇回 平成二六年 四月 一七日(木)
 第二一一回 平成二六年 五月 八日(木)
 第二一二回 平成二六年 五月 二二日(木)
 第二一三回 平成二六年 六月 五日(木)
 第二一四回 平成二六年 六月 一九日(木)
 第二一五回 平成二六年 七月 三日(木)
 第二一六回 平成二六年 七月 一七日(木)
 第二一七回 平成二六年 九月 四日(木)
 第二一八回 平成二六年 九月 一八日(木)

海外渡航

荒木 浩 教授

目的 大田大学校にてシンポジウム参加及

び発表

目的国 韓国

期間 平成二六年四月一日～一四日

磯前順一 准教授

目的 シカゴ大学東アジア研究センターに

て講演

目的国 アメリカ

期間 平成二六年四月二〇日～二四日

ジョン・ブリーン 教授

目的 オレゴン大学、ポートランド州立大

学にてシンポジウム参加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二六年四月二一日～二八日

劉 建輝 教授

目的 浙江工商大学日本語言文化学院にて

講義

目的国 中国

期間 平成二六年四月二四日～二九日

坪井秀人 教授

目的 東呉大学、台湾大学にて講演及び研

究打合せ

目的国 台湾

期間 平成二六年五月二日～五日

劉 建輝 教授

目的 輔仁大学外国語学院にて研究会参加

目的国 台湾

期間 平成二六年五月二日～五日

ジョン・ブリーン 教授

目的 イギリス国立公文書館にて資料調査

目的国 イギリス

期間 平成二六年五月二日～一〇日

末木文美士 教授

目的 慶熙大学校にて研究発表及び研究打

合せ

目的国 韓国

期間 平成二六年五月七日～一〇日

荒木 浩 教授

目的 チューリッヒ大学にて講義、研究交流

及び調査

目的国 スイス

期間 平成二六年五月九日～二〇日

劉 建輝 教授

目的 北京大學外國語學院にて國際會議參

加

- 目的国 中国
 期間 平成二六年五月一五日～一八日
 ジョン・ブリーン 教授
 目的 カリフォルニア大学、ゲティ美術館
 にて研究発表及び資料調査
 目的国 アメリカ
 期間 平成二六年五月二五日～三〇日
 森 洋久 准教授
 目的 濟州大学校にてシンポジウム出席及
 び発表
 目的国 韓国
 期間 平成二六年五月二九日～六月一日
 松田利彦 教授
 目的 高麗大学校にて学術大会出席及び発
 表、韓国国立中央図書館にて資料調査
 目的国 韓国
 期間 平成二六年五月二九日～六月一日
 稲賀繁美 教授
 目的 濟州大学校にてシンポジウム出席及
 び発表、ソウル大学校にて講演
 目的国 韓国
- 期間 平成二六年五月二九日～六月三日
 大塚英志 教授
 目的 北京日本学術研究センター、北京映画
 学院にてワークショップ参加及び講義
 目的国 中国
 期間 平成二六年六月三日～一〇日
 倉本一宏 教授
 目的 アンコールワット遺跡、アンコール
 トム遺跡、アンコール国立博物館にて現地
 調査及び情報収集
 目的国 カンボジア
 期間 平成二六年六月九日～一四日
 劉 建輝 教授
 目的 東北師範大学、北京大学にてシンポ
 ジウム参加及び講演
 目的国 中国
 期間 平成二六年六月二〇日～二六日
 細川周平 教授
 目的 サンパウロ人文科学研究所、ラブラ
 タ大学、移民関係施設等にて史料調査及び
 現地調査
- 目的国 ブラジル
 期間 平成二六年六月二四日～七月一日
 大塚英志 教授
 目的 ボナベンチャホテル、LAコンベン
 ションセンターにて調査、ワークショップ
 参加及び講義
 目的国 アメリカ
 期間 平成二六年六月二八日～七月六日
 磯前順一 准教授
 目的 漢陽大学比較歴史文化研究所にて研
 究打合せ
 目的国 韓国
 期間 平成二六年七月九日～一〇日
 坪井秀人 教授
 目的 漢陽大学校比較歴史文化研究所にて
 国際会議出席
 目的国 韓国
 期間 平成二六年七月一〇日～一三日
 劉 建輝 教授
 目的 中央研究院にてシンポジウム参加及
 び発表

- 目的国 中国
 期間 平成二六年八月一〇日～一五日
 倉本一宏 教授
 目的 高麗大学校日本文化研究センター、誠信女子大学校にて講演
 目的国 韓国
 期間 平成二六年八月一九日～二四日
 坪井秀人 教授
 目的 高麗大学校日本文化研究センター、誠信女子大学校にて講演
 目的国 韓国
 期間 平成二六年八月二〇日～二三日
 細川周平 教授
 目的 ハワイ本願寺、ライマン邸記念博物館、ハワイ大学等にて資料調査及び実態調査
 目的国 アメリカ
 期間 平成二六年八月二二日～九月一日
 末木文美士 教授
 目的 リュブリアナ大学にて国際会議参加、講演、資料調査及び研究打合せ
 目的国 スロベニア
 期間 平成二六年八月二五日～九月一日
 伊東貴之 教授
 目的 リュブリアナ大学、大英図書館、ケンブリッジ大学にて国際会議参加及び発表、資料調査、研究打合せ
 目的国 スロベニア、イギリス
 期間 平成二六年八月二五日～九月五日
 坪井秀人 教授
 目的 リュブリアナ大学にて国際会議出席及び発表、オーストリア国立図書館にて資料収集
 目的国 スロベニア、オーストリア
 期間 平成二六年八月二五日～九月五日
 ジョン・ブリーン 教授
 目的 リュブリアナ大学にて国際会議参加及び発表、資料調査
 目的国 スロベニア
 期間 平成二六年八月二六日～三一日
 劉建輝 教授
 目的 東北師範大学、遼寧省図書館にて資料調査及び講演
 目的国 中国
 期間 平成二六年八月二六日～九月二日
 井上章一 教授
 目的 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展にてシンポジウム参加
 目的国 イタリア
 期間 平成二六年九月三日～七日
 山田要治 教授
 目的 サンフランシスコ・アジア美術館、カリフォルニア大学バークレイ校、ジャパセンターにて研究打合せ及び資料調査
 目的国 アメリカ
 期間 平成二六年九月一〇日～一五日
 倉本一宏 教授
 目的 ハイデルベルグ大学にて講義及びワークショップ
 目的国 ドイツ
 期間 平成二六年九月一日～一六日
 フレデリック・クレインス 准教授
 目的 ルーヴェン大学にて国際会議参加、

発表及び文献調査、研究打合せ

目的国 ベルギー

期間 平成二六年九月一五日～二三日

荒木 浩 教授

目的 中国人民大学にて講演及び研究交流

目的国 中国

期間 平成二六年九月二二日～二五日

稲賀繁美 教授

目的 パリ日本文化会館、ギャルリー・コ

ルベール講堂、ビブリオテークナシヨナル

にて講演及び公開討論会

目的国 フランス

期間 平成二六年九月二二日～二八日

郭 南燕 准教授

目的 上海図書館・劇場等にて資料調査

目的国 中国

期間 平成二六年九月二六日～一〇月六日

所員活動一覽(二〇一四年四月一日～九月三〇日)

荒木 浩

●著書

荒木浩編『中世文学と隣接諸学 第一〇巻 中世の随筆―成立・展開と文体―』竹林舎 二〇一四年八月 五八四頁

●論文

『二十六夜』の信仰と捨身」プラット・アブラハム・ジョージ編『インド宮澤賢治国際学会 宮澤賢治と共存共栄の概念…賢治作品の見直し』

Northern Book Centre 二〇一四年六月 一二～二三頁

『方丈記』と『徒然草』―へわたしとへ心の中世散文史― 荒木浩編『中世文学と隣接諸学 第一〇巻 中世の随筆―成立・展開と文体

―』竹林舎 二〇一四年八月 二六二～二九二頁

「読者としての長明―保胤の記述に「自己」を見出すこと―」(編訳) 荒木浩編『中世文学と隣接諸学 第一〇巻 中世の随筆―成立・展開と文

体―』竹林舎 二〇一四年八月 二二九～二五七頁

●その他の執筆活動

『方丈記』再読『京都学問所紀要 創刊号 鴨長明 方丈記 完成八〇〇年』下鴨神社京都学問所 二〇一四年六月 一七四～二二二頁

『ソフィア京都新聞文化会議 インドに見る『今は昔』』『京都新聞』二〇一四年四月二五日

「インタビュー 光源氏 出家し損ねた釈迦?」紫式部 仏伝もとに執筆 荒木浩・日文研教授が新説『読売新聞』(大阪版・夕刊) 二〇一四

年七月三日

磯前順一

●著書

Religious Discourse in Modern Japan: Religion, State, and Shinto, Brill, June 2014, pp. 474.

『宗教と公共空間―見直される宗教の役割』（島蘭進と共編著）東京大学出版会 二〇一四年七月 二八八頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 越境者たち 知の現場から 宗教学者の磯前順一さん」『京都新聞』（夕刊）二〇一四年六月一六日

伊東貴之

●論文

『感情記憶』的印象——歴史叙述の主観性與客観性』『二十一世紀』二〇一四年四月號／總・第一四二期 香港中文大學・中國文化研究所
二〇一四年四月 二四〇～二八頁

“Li Gong’s Standpoint: Towards a Reconsideration of the Yan-Li School,” *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko* 『東洋文庫・欧文紀要』
No. 71, The Toyo Bunko (The Oriental Library), June 2014, pp. 1～43.

●その他の執筆活動

「解説 近代東アジア人物思想交流史研究と著者（徐興慶）をめぐって」徐興慶著『東アジアの覚醒——近代日中知識人の自我認識』研文出版
二〇一四年八月 二九九～三〇七頁

「中国から見た複数言語と日本研究」『日文研』五三号 二〇一四年九月 二〇〇～二七頁

稲賀繁美

●論文

「クールベと政治 一八六二～一九一八年―批評家テオドル・デュレの見たクールベの半世紀―」喜多崎親編『西洋近代の都市と芸術 第二卷
パリー―一九世紀の首都』竹林舎 二〇一四年四月 二七五～二九四頁

「六〇年代ポップ・アートとは何だったのか。―広告産業の構造的変貌の関数としての民衆画像」『あいだ』二二二号（連載第一〇一回）
二〇一四年四月 二八～三一頁

「アウトサイダー・アートとオール・ブリュットとのあいだ(前)』『あいだ』二二三号(連載第一〇二回) 二〇一四年六月 二三〜二八頁
 “Toward The Pirates’ View of Commercial Transaction,” (交易の海賊史観にむけて：美術品交易を中心として) “I HAVE” Knowledge Service
International symposium, Say about “Technology and Value of Brand.” May 29th-June 1st, 2014 Jeju, Korea, pp. 41-51.

“Hokusai controversé—La réception de son œuvre en France entre 1860 et 1925,” Jean-Sébastien Cluzel éd, HOKUSAI - *Le yeux fou d'architecture*, Paris: Seuil, 2014, pp. 75-89.

「アウトサイダー・アートとオール・ブリュットとのあいだ(後)』『あいだ』二二四号(連載第一〇三) 二〇一四年七月 二五〜二九頁

『継ぐ』ことと『償い』と—伝統の喪失から喪失の伝統へ—京都芸術センター叢書一『継ぐこと・伝えること』京都芸術センター 二〇一四年八月 二七九〜二八三頁

「あやうい未成熟な少女は宗教画の原点を——神聖 sacré 犠牲 sacrifice として冒瀆 sacrilège」『あいだ』二二五号(連載第一〇四) 二〇一四年九月 一七〜二二頁

●その他の執筆活動

「書評 歴史認識の断層と、蘇生する記憶断片との交錯地点を踏査する——伝統を乗り越えようとする者に手がかりを与えてくれるぎざぎざの切断面がひらける場所へ 荒原邦博著『ブルースト、美術批評と横断線』(左右社, 二〇一三年)『図書新聞』第三一五八号 二〇一四年年五月

「書評 『うつし』のパラダイム探索にむけて——オリジナル vs コピイの軛からの脱却への道標 島尾新・彬子女王・亀田和子編『写しの力—創造と継承のマトリクス』(思文閣出版, 二〇一四年)『図書新聞』第三二六三号 二〇一四年六月

「書評 東西の文化交流を縦横に体现する驚異的な知の考古学 前田耕作者『パラムナード 知の痕跡を求めて』(せりか書房, 二〇一四年)『週刊読書人』二〇一四年六月二〇日号

「コラム ハリーコ・アダッチオの夢世界①〜⑥…あるアマチュア日曜陶藝家の生活と意見」『刊行によせることば アリコからハリーサへ—ハリーコ・アダッチオのイタリア紀行によせて』足立晴彦著『ハリーコ・アダッチオのイタリア紀行』アダッチオ工房 二〇一四年六月 二二〜二三頁、三六〜三七頁、四八〜四九、七二〜七三頁、八六〜八七頁、九八〜九九頁、一一六〜一一七頁

「根絶やしと、根をはることと―ルーツとルーツの対話―日仏シンポジウムより」『図書新聞』第三一六九号（連載一四三）二〇一四年八月
「ものをつくる、ということについて」『かみはま合気道』二〇一四年度版第一六号 三重大学合気道部OB会 二〇一四年八月 四～五頁
「植民地経験と郷愁―日本比較文学会シンポジウム『ナシヨナリズムと郷愁』より」『図書新聞』第三一七六号（連載一四四）二〇一四年九月

井上章一

●その他の執筆活動

「ナイトクラブのジャズピアノ」『季刊 ひょうご経済』第一二二号 一般財団法人ひょうご経済研究所 二〇一四年四月

「書評 大村幸弘著『トロリアの真実』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年四月一六日

「解説 江戸期の大阪を捉えた宮本史学」宮本又次著『文春学藝ライブラリー 関西と関東』文藝春秋 二〇一四年四月二一日

「生涯学習はむずかしい」共同通信配信 二〇一四年四月下旬

「書評 木下直之著『銅像時代』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年五月七日

「書評 『悪条件』が建築家の想像力と職人の心意気をたかぶらせた 松原隆一郎・堀部安嗣著『書庫を建てる』」『週刊ポスト』二〇一四年五月

二三日号

「帯」平松隆円著『邪推するよそおい』織研新聞社 二〇一四年五月三〇日

「六甲おろしの風むき」共同通信配信 二〇一四年五月下旬

「書評 喜安朗著『転成する歴史家たちの軌跡』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一四年五月二八日

「掲示板」『週刊新潮』二〇一四年五月二九日号

「現代の建築家・一九 磯崎新一ューモアにこそ賭ける」『GA JAPAN』128 二〇一四年五月

「安倍総理の『保守』を問う―ほろぼされた側の魂しずめ」『文藝春秋』二〇一四年六月号

「無責任なレットテル貼り」『朝日新聞』（名古屋版）二〇一四年六月八日

「対談 安土桃山時代は、本来、安土大坂時代です。古墳時代にしても…。」（樋口武男と）（採録）樋口武男著『熱い心が人間力を生む』文藝

春秋 二〇一四年六月一五日

〔書評 岡田暁生・フィリップ・ストレンジ著『すごいジャズには理由(ワケ)がある』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一四年六月一八日
「バレンティンをおねがい」 共同通信配信 二〇一四年六月下旬

〔対談 それでも阪神タイガースが好きだった』(中川右介と)『関西ウォーカー』 二〇一四年七月一日

〔靈柩車語り尽くし対談 続きは、あの世で』(町田忍と)『望星』 東海教育研究所 二〇一四年七月号

〔書評 大橋幸泰著『潜伏キリシタン』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一四年七月九日

〔書評 高水準で欧化された音楽、その途上における混淆例 奥中康人著『和洋折衷音楽史』『週刊ポスト』二〇一四年七月一日号

〔歴史は、ただただ面白い』『歴史に学べば日本人はもっと元気になるぞ』大和ハウス工業株式会社 二〇一四年七月一二日

〔書評 小林正信著『明智光秀の乱』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一四年七月三〇日

〔現代の建築家・二〇 安藤忠雄―大阪から世界へはばたいた』『GA JAPAN』129 二〇一四年七月

〔書評 戸田学著『上方落語の戦後史』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一四年八月二〇日

〔書評 麻田雅文著『満蒙』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一四年九月一〇日

〔書評 日本人は容姿への劣等感とどう向き合ってきたのか 眞嶋亜有著『肌色』の憂鬱 近代日本の人種体験』『週刊ポスト』二〇一四年九月一二日号

〔解説 『陰翳礼讃』をあえて建築論的に読みこめば』谷崎潤一郎著『陰翳礼讃』 角川学芸出版 二〇一四年九月二五日

榎本 渉

● 論文

〔南北朝時代の臨済宗幻住派・金剛幢下における境内空間』白幡洋三郎編『作庭記』と日本の庭園』思文閣出版 二〇一四年四月 三〇七〜三二七頁

〔宋・元交替と日本』『岩波講座 日本歴史第七巻 中世二』岩波書店 二〇一四年四月 七七〜一二頁

●その他の執筆活動

「両浙地域の仏教と日本」小島毅監修、静永健編『東アジア海域に漕ぎ出す六 海がはぐくむ日本文化』東京大学出版会 二〇一四年四月
九六～一〇頁

大塚英志

●著書

『黒鷲死体宅配便』一九卷（山崎峰水と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一四年四月 一九二頁

『恋する民俗学者』一卷（中島千晴と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一三年五月 一九一頁

『多重人格探偵サイコ』二〇卷（田島昭宇と共著）株式会社KADOKAWA 二〇一四年七月 一六三頁

『이야기 체조』〔物語の体操〕韓国語版、宣政佑訳 북마이북 二〇一四年七月 二四〇頁

『캐릭터 메이커』〔キャラクターメーカー〕韓国語版、宣政佑訳 북마이북 二〇一四年八月 二六八頁

『만화로 배우는 이야기 학교』〔物語の学校〕韓国語版、野口克洋と共著、宣政佑訳 북마이북 二〇一四年八月 二五三頁

『神隠し・隠れ里 柳田国男傑作選』〔編著〕角川学芸出版 二〇一四年九月

●その他の執筆活動

『解説 中上健次についての批評的なノート』『中上健次集 一』インスクリプト 二〇一四年四月 五七七頁～六〇八頁

『二階の住人とその時代』〔連載〕『熱風』二〇一四年四月号～六月号 株式会社スタジオジブリ

『もどき開口 木島日記 完結編』『怪物の民俗学』第六回「恋する民俗学者」（中島千晴と共著）『怪』Vol. 0041 株式会社KADOKAWA

二〇一四年四月

『多重人格探偵サイコ』〔田島昭宇と共著〕『ヤングエース』二〇一四年五月号～一〇月号 株式会社KADOKAWA

『黒鷲死体宅配便』〔山崎峰水と共著〕『ヤングエース』二〇一四年五月号～一〇月号 株式会社KADOKAWA

『八雲百怪』〔森美夏と共著〕『ヤングエース』二〇一四年五月号～一〇月号 株式会社KADOKAWA

「世界まんが塾」(第七回～一二回)『ヤングエース』二〇一四年五月号～一〇月号 株式会社KADOKAWA

「書評 T・グルンステン、B・ペーターズ『テプフェール マンガの発明』」『週刊ポスト』二〇一四年五月三〇日号

「解題『ジブリの教科書一六 借りぐらしのアリエッティ』」文藝春秋 二〇一四年六月 二〇八～二二九頁

「書評 鈴木洋仁『平成』論」『週刊ポスト』二〇一四年七月四日号

「もどき開口 木島日記 完結編」『怪物の民俗学』第七回「恋する民俗学者」(中島千晴と共著)『怪』Vol.0042 株式会社KADOKAWA
二〇一四年七月

「解題『ジブリの教科書七 紅の豚』」文藝春秋 二〇一四年九月 二二五～二四八頁

郭南燕

●その他の執筆活動

「『バイリンガルな日本語文学』の将来性」『日文研』五三三号 二〇一四年九月 一五～一九頁

北浦寛之

●論文

「関西支部第七二回研究会『スクリーンの拡大とその余波―ワイドスクリーン映画の導入にともなう撮影様式の変化について』」『日本映像学会報』No.167, 2014 日本映像学会 二〇一四年七月 五頁

「映画のなかのテレビ・メディア―昭和三十年代の映像産業の攻防を通して」『日本研究』第五〇集 国際日本文化研究センター 二〇一四年九月 一九一～二〇七頁

倉本一宏

● 著書

日本文藝家協会編『ベスト・エッセイ二〇一四』（共著）『御堂関白記』は何故にすごいのか 光村図書 二〇一四年六月

● その他の執筆活動

「藤原道長『御堂関白記』と世界記憶遺産への道程」『図録 華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展』九州国立博物館 二〇一四年四月 一一～一七頁

「蘇我氏の謎を解く」「蘇我氏を知るための基礎知識」『歴史読本』二〇一四年一〇月号 KADOKAWA／中経出版 二〇一四年八月 四〇～四五頁、四六～五一頁

「天武天皇―なぜ、近江朝廷を武力で倒さねばならなかったのか？」『歴史読本編集部編』ここまでわかった！日本書紀と古代天皇の謎』KADOKAWA／中経出版 二〇一四年八月 二四四～二五六頁

小松和彦

● 著書

『呪いと日本人』（角川ソフィア文庫）角川学芸出版 二〇一四年七月

● 論文

「宮澤賢治とアニミズム的感性―その『まなざし』の位置を考える―」プラットフォーム・アブラハム・ジョージ編『インド宮澤賢治国際学会 宮澤賢治と共存共栄の概念：賢治作品の見直し』Northern Book Centre 二〇一四年六月

● その他の執筆活動

「反面教師としての折口信夫」『現代思想』五月臨時増刊号（第四二巻第七号）青土社 二〇一四年四月

『妖怪キャラクター大辞典』（飯倉義之と共同監修）株式会社カンゼン 二〇一四年五月

『魔獣狩りの世界』夢枕獏著『魔獣狩りⅢ 鬼哭編』（新潮文庫）新潮社 二〇一四年六月

「なるほどランド 怖いけどおもしろい妖怪」『中日新聞』二〇一四年六月一日

『日本の妖怪完全ビジュアルガイド』（飯倉義之と共同監修）株式会社カンゼン 二〇一四年六月

対談 日本人は妖怪がお好き」（夢枕獏と）『HUMAN』知の森へのいざない』Vol.6 平凡社 二〇一四年七月

「生き証人の貴重な記録 千葉作龍著『名人が語る・ねぶたに賭けた半世紀』『東奥日報』二〇一四年七月二五日

『「ミステリアス京都」ミステリアス京都は幻想のなかにある（下）』『創造する市民』第一〇三号（公財）京都市生涯学習振興財団 二〇一四年

七月

『別冊宝島二二二五 日本の妖怪』（飯倉義之と共同監修）宝島社 二〇一四年九月

「はじめに」『別冊宝島二二二五 日本の妖怪』宝島社 二〇一四年九月

『魔境・京都』（内藤正敏と共著）夢枕獏編著『鬼譚』（ちくま文庫）筑摩書房 二〇一四年九月

末木文美士

●著書

『東亜佛教研究』全五卷（共編著）宗教文化出版社 二〇一四年三月

『シリーズ日蓮一 法華経と日蓮』（共編著）春秋社 二〇一四年五月 三六〇頁

『シリーズ日蓮四 近現代の法華運動と在家教団』（共編著）春秋社 二〇一四年七月 四二〇頁

●論文

『東西禅師と密教』「禅文化」二二三号 公益財団法人禅文化研究所 二〇一四年四月 一四～二〇頁

『法華経の思想』小松邦彰・花野充道編著『シリーズ日蓮一 法華経と日蓮』春秋社 二〇一四年五月 三四～四九頁

『禅から井筒哲学を考える』安藤礼二・若松英輔責任編集『道の手帖 井筒俊彦』河出書房新社 二〇一四年六月 一四四～一五二頁

“La collection d'œuvres de Bernard Frank et le «Repertoire illustré d'icongraphie bouddhique»”, *Ōtuda: Amulettes et talismans du Japon*, Collège de France : Institut des hautes Études Japonaises, 2014, pp. 39–67.

●その他の執筆活動

- 「堀辰雄を愛した頃」『三田文学』No.117（二〇一四年春季号）二〇一四年四月 二六一～二六七頁
「禅研究の現在」（講演記録）『夏期大学講座「禅といま」講義録』二〇一四年七月 一三〇～一四六頁

瀧井一博

●その他の執筆活動

- 「政治学の古典を読む（七） 分裂した魂の所有者」『究』五月号（通巻第三八号）ミネルヴァ書房 二〇一四年五月 四四～四五頁
「政治学の古典を読む（八） 明治維新研究の原点」『究』八月号（通巻第四一号）ミネルヴァ書房 二〇一四年八月 四四～四五頁
「工学院大学創立一二五周年記念企画 大学ゆかりの人物シリーズ 忘れられた知の巨人～渡邊洪基の生涯～」二〇一四年八月

早川聞多

●著書

- 『おとなの愉しみシリーズ一 春画』すばる舎 二〇一四年五月 二二二頁
『喜多川歌麿「願ひの糸ぐち」』（監修・翻刻解説）芸術世界社 二〇一四年六月
『おとなの愉しみシリーズ二 英語と現代文でたのしむ春画 喜多川歌麿「願ひの糸ぐち」すばる舎 二〇一四年七月

●論文

- 「日文研所蔵『地獄草紙絵巻』を読み解く」『怪』Vol.0041 株式会社KADOKAWA 二〇一四年四月 二一九～二二五頁
「四百年前の祇園」『キをん』No.218 祇園甲部組合 二〇一四年四月 二七～二八頁
「春画のなかの源氏物語」『浮世絵で愉しむ源氏物語』双葉社 二〇一四年九月 八二～一二〇頁

ジョン・ブリン

●著書

Lo Shinto: una nuova storia (Mark Teeuwen と共著) イタリア語訳 E. Giulia) Astrolabio Ubaldini, 2014.

●その他の執筆活動

『現代の言葉 柔らのすすめ』『京都新聞』(夕刊) 二〇一四年八月一八日

Japan Review No. 27 (編集) 二〇一四年八月

細川周平

●その他の執筆活動

「コンサート評 大野松雄 音の世界」『毎日新聞』(関西版・夕刊) 二〇一四年六月一八日

「日々是好音——細川周平の音楽時評五 大野松雄 音の世界」『アルテス』二〇一四年七月号 九〜一四頁

「コンサート評 EPO」『毎日新聞』(関西版・夕刊) 二〇一四年八月六日

「書評 日比嘉高著『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』」『日本文学』Vol. 63 日本文学協会 二〇一四年八月 一一〇

〜一一二頁

松田利彦

●その他の執筆活動

「書評 小野容照著『朝鮮獨立運動と東アジア——一九一〇—一九二五——』」(思文閣出版、二〇一三年三月)『東洋史研究』第七三卷第二号

二〇一四年九月 一三六〜一四三頁

山田奨治

●論文

「学術情報と著作権、そしてTPP」『DHip』No.3 勉誠出版 二〇一四年四月 二二〜二六頁

●その他の執筆活動

「コメント 盗作の考現学 蔓延するバクリ・ツイート・コピペ論文」『朝日新聞』二〇一四年五月六日

「表紙の図『百鬼夜行総巻』(作者不詳、国際日本文化研究センター蔵)について」『HUMAN—知の森へのいざなひ』Vol.6 平凡社

二〇一四年七月

「第二七六回日文研フォーラム『めぐりめぐる日本文化』ディスカッション(高馬京子・ハラルド・フース・深井晃子・佐野真由子と)」『第

二七六回日文研フォーラム めぐりめぐる日本文化』国際日本文化研究センター 二〇一四年八月

「コメント 越境者たち 知の現場から七 言語文化研究の高馬京子さん 世界を巡るkawaii リトアニアで言説を分析」『大阪日々新

聞』二〇一四年九月一二日ほか(共同通信社配信)

「自著を外国語にすること」『日文研』五三号 二〇一四年九月 三六〜四〇頁

劉 建輝

●論文

「日本植民地文学研究回顧」(中国語) 魏大海・李征・譚晶華編『日本文学研究——歴史交匯與想像空間』青島出版社 二〇一四年八月

「植民地文学研究」王志松・島村輝編『日本近現代文学研究』外語教学與研究出版社 二〇一四年八月

●その他の執筆活動

「インタビュール 日本統治——搾取と近代化」『読売新聞』(大阪版・夕刊) 二〇一四年七月二九日

日文研 五十四号

二〇一五（平成二七）年三月三十一日発行

編集 坪井秀人、佐野真由子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889

日本文学研究五十四卷

一九九五年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月

二〇〇〇年三月